

# 大学における平和教育

—アンケート調査にみる現状と方向—



# 大学における平和教育

## 目 次

はじめに .....	3
I 経 過 .....	4
II 調査の集計 .....	7
1. 平和教育の概要 .....	7
(1) 形態別集計の概要 .....	7
(2) 専門分野別事例 一個人担当の講義(a) および(b) — .....	8
(3) 総合講座(c) .....	10
① 概 要 .....	10
② カリキュラム表 .....	12
(4) 公開講座(e) .....	36
① 概 要 .....	36
② カリキュラム表 .....	37
(5) 大学別総括表 .....	42
2. テキストおよび参考文献など .....	43
(1) 個人担当の講義および演習 — テキスト — .....	43
(2) 個人担当の講義および演習 — 参考文献, 視聴覚資料名 — .....	44
(3) 総合講座のテキストまたは参考文献など .....	46
(4) 「大学における平和教育」にかんする研究・実践報告など .....	50
(5) 見学・訪問・調査など .....	51
3. 開設初年度 .....	52
4. 教育内容・方法 .....	53
5. 評価の方法 .....	54
6. 学生の反応 .....	56
7. 問題点と抱負 .....	58
※ 参考資料 .....	62
III 結び(方向) .....	67
アンケート調査用紙 .....	68
あとがき .....	71

**表紙の日本郵便国際平和年切手（「鳩」川端 有画）は11月28日発行予定**

## はじめに

日本科学者会議

平和・軍縮教育委員会

国際平和年の今年1986年は、日本国憲法公布40年にあたっている。「平和」憲法としてのこの憲法は、その40年間の航跡にみられる無残な形骸化にもかかわらず、戦後日本の「平和」を守ってきたし、その世界史的意義と役割は、今日かえってますます大きくなりつつある。かつて1946年3月に幣原喜重郎首相は、この憲法が過去への反省にとどまらず、将来おとずれるであろう核時代の先駆的意義を持つことを予言していたが、それはまさに適中して今日にいたっている。

このときにあたり、一定の社会的条件の下で科学者も加わって生みだしつつある膨大な核兵器体系や、各種の「開発」にともなう環境破壊などにたいして、研究・教育にたずさわる私たち科学者は、みずからの問題として、その克服のために立ちむかう社会的・道徳的責任を負うことには、あらためて思いを致すものである。とりわけ私たちは、日本の科学者として、平和と民主主義を築くために、教育の力に期するところ大なるものがある。

平和・軍縮教育は、実に、現代が生みだした最大の人類史的課題に対応することを余儀なくされている私たちの、決して避けて通ることを許されぬ普遍的責務となっている。しかも大学・研究機関に所属する私たちは、初等・中等教育に従事する教師たちとも異なって、産・軍・学協同などの技術研究に直接かかわる科学者の同僚でもあり、SDIに協力させられようとしている今とくに、その責任は格段に大きいと言わねばならない。

80年代に入って澎湃としておこりつつある大学における平和教育は、ここにその必然的根拠を有しており、今後の飛躍的発展が要請されている。日本科学者会議平和・軍縮教育研究委員会は、その初仕事としておこなった大学における平和教育の現状にかんする調査の結果を、ここに冊子として世におくることができるのを喜ばしくおもうとともに、この調査に協力を惜しまれなかった、本会内外の方々にたいし、厚く御礼申上げる次第である。もとより調査の範囲（対象）についても、内容や集計の仕方についても不十分なものではあるが、大学における平和教育研究の基礎資料として、また平和教育の充実と発展のために活用していただければ幸いである。今回は、主としてデータの紹介に力点をおいたが、忌憚ないご意見を寄せていただき、いっそう広範な平和教育・平和研究の実践者のあいだに交流の輪を広げていきたいと念願している。

1986年11月3日

## I 経 過

戦後日本の教育のなかで、「平和教育」の占めている位置と重要性は、ことのほか大きいものがあり、その経験と蓄積も少なくない。そのなかにあって、大学・短大などの高等教育で、一体どのような「平和教育」がなされてきたかと問われると、その実態すら容易に明らかではないのが現状である。もちろん、戦後日本の科学者・研究者は、日本学術会議の結成（1949年）に代表されるように、戦中の反省をふまえつつ、反戦・平和・民主主義の旗をかけってきた。たとえば、日本学術会議第6回総会（1950年）は「戦争を目的とする科学の研究には絶対従わない決意の表明」を声明したし、第17回総会（1954年）の「核兵器研究の拒否と原子力研究三原則」声明は、「原子力基本法」（1955年）、「民主・自主・公開」）に反映しさえた。そして、その後も、よくその姿勢を貫ぬくべく努めてきたことは事実である。

しかし、それにもかかわらず、大学「教育」のなかで、とりわけ意識的に——「とりたてて」——平和教育が実践され、その内容が発表・相互批判されてきたかといえば、そうとは言えない。日本教育学会の大会も、課題研究として「平和教育」を70年代半ばから設けてきているけれども、「小・中・高校・大学を通じての平和教育」を取りあげたのは、1982年にいたってのことであり（『教育学研究』1983年3月）、「大学」にしぼっての報告は'84年のことであった（同誌、'85年3月）。

実は、このことは、'80年代初めから「大学における」平和教育が急速に拡がりつつあることを示している。それが、何に起因するのかといったこともまだ推測のかぎりでしかないが、核軍拡を頂点とする軍拡の飛躍

的進行、アジア・アフリカ問題の深刻化、そして2回にわたる国連軍縮特別総会にかかる広範な取りくみなどは、その指標であろう。それは、各種の集会でも裏づけられている。第5回の日本教職員組合大学部教職員研究集会（1985年9月14～16日、於・福島大学）では初めて、それまでの「平和問題」を「平和教育」に特定し、かつ、「問題別交流会」から「平和教育懇話会」へと、「分科会」に準じた扱いとして取りあげられ、今年の第6回研究集会（1986.9.於・神戸大学）へ引きつがれた。また、日本学術会議「平和問題研究連絡委員会」（委員長・川田侃）においても、「大学等における平和教育の現状と問題点」をめぐって討議がおこなわれ、各研究者間のネットワークづくりに取りくむことが確認されている（1985年12月4日）。

日本科学者会議（1965年創立）二十数年の歩みは、科学の自主的発展を平和と民主主義のためにこそ促そうとしてきた足跡といえよう。とりわけ軍縮と平和教育問題への追求は、その総合学術研究集会（第1回＝1976年～第5回＝1984年）において集約的に表現されており、集会のメイン・テーマ、「人間生存の課題を考える」（第4回）、「人類生存の展望と戦略」、「人間の生存と進歩のためのプログラム」（第6回）自体からして、軍縮および平和教育をとらえる今日的視点が明らかである。第3回集会（'80年12月6～7日）におけるシンポジウム「平和と軍縮」での平和「教育」への強調を初めとして、第4回集会（'82年11月20～23日）では分科会「軍縮・平和と教育」が設けられ、そこでは「平和・軍縮教育」問題にかんする何らかの恒常的な検討の必要性に言及されていた。第5回研究集会（'84年11月21～25日）でも総合科目

としての平和講座についての報告（琉球大）や、15大学が参加しての「平和問題交流会」が持たれた。

これらの推移を見据えて日本科学者会議は、既設の「軍縮問題研究委員会」に加えて、あらたに「平和・軍縮教育研究委員会」を設置し（1985年5月、第20回定期大会決定），今日にいたっている。本委員会の活動は、第21期定期大会において、つぎのように報告されている（『日本の科学者』1986年8月号）。

#### 平和・軍縮教育研究委員会

大学における平和教育の拡大と内容の充実をはかることをめざし、今期（21期）発足した本委員会は、1985年10月に委員会を開催し、各委員の平和教育への実践経験の紹介と、今後の委員会の活動内容についての討議を行なった。その結果もふまえ、大学における平和教育の実態を調査するために、「平和講座」等を開講している大学教員についてのアンケート調査を行なった。また委員相互の情報を交流するため、「平和・軍縮教育研究委員会ニュース・レター」を発行し、国際平和年関係の資料や関連する出版物などの紹介を行なった。

本冊子は、上記のアンケート調査の集計結果をまとめた資料集である。

#### 〔質問項目について〕

昨年（1985年）末から質問項目等の検討を、ワーキング・グループ4名を中心に、他委員の意見を徴しつつ行ない、調査対象・範囲については、

- 1 国公私立の大学（大学院を含む。）、短大にかぎる。ただし大学（学部）主催の市民公開講座も入れる（したがって、回答のあった「世田谷市民大学」は、大学とのかかわりが不明のため集計から除

外した。学生の自主的学習に対する大学教師の協力・関与についても、これを重視して項目を立てる。

- 2 とくに「平和講座」などの名称を用いない場合も、したがってまた個人担当の講義や演習の一部において行なっている場合も含める。
- 3 「平和問題」の範囲については、とにかく「戦争に限定せず、人権抑圧や貧困・飢餓の問題等を含む」という表現で示すことにした。

したがって、この「範囲」については、個人担当のものにおいて特に主観的にならざるをえなかった。著名な「平和問題」研究者から、自分の属する学部では「該当するものはありません」との回答をいただいたのも、そのためかも知れない。また「質問項目は必ずしも適切でない」と付記されて回答された方が1名あった。個人に対する質問と制度に対する質問とが入りまじっているとの批判と聞いている。

#### 〔調査依頼について〕

実際の調査依頼は1986年2月中旬から5月にかけて行なわれた。あらかじめ平和教育を実施していると思われる方へ個人宛に直接送ったものと、日本科学者会議の各支部事務局宛に発送して実施者へ記入を依頼していただいたもの、という二重の方法をとった。したがって、全国的調査ではあるが悉皆調査ではない。依頼状況は、次の通りである。

##### 1. 個人宛

- (1) 第1次依頼 75名（48大学）  
2月18日発送、4月末締切
- (2) 第2次依頼 19名（18大学）  
5月29日発送、6月末締切  
計 94名（延66大学）
- (3) (1)への催促 39名（27大学）  
5月27日発送、6月末締切

## 2. 日本科学者会議各支部宛

3月12日発送、 4月末締切、

47支部へ、 計320部発送。

内訳	東京支部	50部	50部
	大阪"	20部	20部
	北海道、 宮城、 愛知、 京都、 福岡へ		
	各10部	50部	
	その他の40支部へ		
	各5部	200部	

### 〔調査集計について〕

ワーキング・グループを中心として5月25日に集計を開始し、 約44例の回答を得たが、 再依頼分も含めて8月20日の時点で43大学より69の実施例が、 57名の記入協力者によって提供された。そのうち、 3名は個人名の発表を差し控えることを希望された。1人で数例を回答された方も、 逆に一つの総合講座について数人の方が回答して下さった例もある。

なお、 未実施である旨の回答が4大学（学部）・1短大からあった。その他、 このアンケートの趣旨には「やや遠く」等と、 回答を遠慮された数名の方から、 その旨のお便りをいただいている。実践者で未回答の方もまだ多いと思われる（総合講座についてのみ、 未回答の3大学例を紹介させていただいた。）。1985年度の実施例を質問したことが、 影響しているかも知れない。

ワーキング・グループによる集計結果は9月7日の本委員会に報告され（報告者：堀委員）、 この冊子として編集・発行することになった。



## II 調査の集計

### 1 平和教育の概要

#### (1) 形態別集計の概要

回答された諸例を、講座・講義等の形態別に分けて集計すると、以下のようになる。

(a, b … f は、アンケート項目の II. (4)に対応している。)

a) 個人が担当している講義（カリキュラムの一部も）	34 (32)
b) 個人が担当しているゼミナール（カリキュラムの一部も）	12 (10)
c) 総合講座（学生対象で、複数の教師が担当しているもの）	17 (17)
d) 学生の自主的研究・学習活動への協力	0 (0)
e) 一般市民むけ公開講座（そこに学生が参加する場合も）	6 (4)
f) その他	0 (0)
計	69 (63)

#### 〔コメント〕

- \* 1985年度の概況を中心に調査したため、同年度も実施されたものを（…）の数字で表わした。
- \* 「c) 総合講座」は、この他に少なくとも数例は実施されており（後ページ参照），全体で約20大学におよぶものと思われる。
- \* 「d) 学生への自主活動への協力」例が皆無であるのは、極めて特徴的であり、大学教育としての「平和教育」の重大な問題点を示している。（ただし、若干例は後掲II-6「学生の反応」など参照）

## (2) 専門分野別事例

### —個人担当の講義(a)および演習(b)—

個人担当の講義 (a) : 34例

個人担当の演習 (b) : 12例 計46例を、専門分野別に分類すると、表Iのとおりである。

#### 〔コメント〕

- \* 専門分野は、(区分のレベルが一定ではないが) 8つに分けた。
- \* この結果でみるとかぎり、社会科学が多く、そのなかでは広義の政治学が多く、歴史学、教育学などが多い。自然科学のなかでは物理学が比較的多い。

専門分野	事例数	a)	b)
1. 平和学	4	(3,	1)
2. 法律学	3	(3,	0)
3. 政治学	10	(8,	2)
4. 社会学	3	(1,	2)
5. 経済学 (「社会思想」を含む)	4	(2,	2)
6. 哲学・倫理学	4	(2,	2)
7. 教育学	8	(6,	2)
8. 自然科学*	10	(9,	1)
		*	物理学3, 医学3,
			その他4
計	46	(34, 12)	

表I 専門分野別事例

専門分野	番号	講義題目	大学名	対象学生	実施年度	担当者(所属など)
1 平和学	a-1	平和学Ⅰ, Ⅱ	広島大	総合科学部社会文化コース	'78 ~ 半期	I 前期 森祐二 II 後期 松尾(雅) 佐藤(幸)
	a-2	平和学	四国学院大	文, 社会学科	'76 ~ 通年	岡本三夫 学外ゲスト3名
	a-3	平和学特講	四国学院大	" "		岡本三夫
	b-1	平和学演習	四国学院大	" "		岡本三夫
2 法律学	a-4	一般法学	宇都宮大	全学 平均出席 400/登録500名	'82 ~ 通年	宮本栄三(兼)
	a-5	国際法Ⅰ	名古屋大	法(経, 文, 育) 50/150	開講いらい~ '69 ~ 通年	松井芳郎(法)
	a-6	国際法Ⅱ	"	法(経, 文, 育) 30/100	通年	岡田泉(南山大)
3 政治学	a-7	国際政治学	東北大	法4年生 100/180	? ~ 通年	大西仁(法)
	a-8	平和紛争論	筑波大	社会学類(中心に) 50/100	'75 隔年半期	進藤栄一
	a-9	国際政治(アジア政治外交史)	東大	院		関寛治(他大学への出講, 数多)
	a-10	国際平和論	法政大	社会学部2年生	'86 ~	栗野鳳(.....)
	b-2	平和論 (ゼミ形式)	新潟大	法(経, 人文) 20	'82 ~ 半期	
	a-11	国際政治史	名古屋大	法(文, 経, 育, 10数名)	'84 ~	佐々木雄太
	a-12	国際行動論	大阪大学	40/100	'82 ~ 通年	馬場伸也
	b-3	国際行動論演習	"	法 120/190	'86	"
	a-13	国際関係論IV	広島大	法院, 社会科学研究科	'84 ~ 通年	森祐二
	a-14	政治学	鹿児島大	全学(文系1年, 理系2年) 100/200 × 2クラス	'84 ~	功刀(くぬぎ)俊洋

	専門分野	番号	講義題目	大学名	対象学生	実施年度	担当者(所属など)
4	社会学	a-15	教育社会学	北海道教大 釧路分校	育、教育学専攻生 30/45	'85 隔年前期	三宅信一
		b-4	社会学期前演習	一橋大	社、1~2年生 全員/3~13	'79 ~ 通年	浜谷正晴(テーマ・ 戦争体験を考える " (被爆者調査・ 横田基地騒音公害)
		b-5	社会学期後演習	"	社、3~4年生, 7/4 ~ 11	'79 ~	
5	経済学	b-6	経済発展論の研究	早稲田大	政経、20/20	'70 ~ 通年	西川潤
		a-16	教育経済論	法政大	経3、4年生 20/100	'67 ~昼夜 隔年通年	尾形憲
		a-17	社会思想	長崎大	経 25/44	非常に早くか ら "	岩松繁敏
		b-7	社会思想 演習	"	経		"
6	哲学・倫理学	a-18	宗教学・倫理学 特講	弘前学院大	文	'71 ~	米沢紀
		b-8	一般教育演習 (倫理学)	福島大	育(1年) '78 6/6 '82 18/20	'78 と'82 通年	堀孝彦(テーマ・ 「平和の思想」)
		b-9	社会科演習 (倫理学)	"	育(3, 4年) '78 25/30 '82 13/15	'78 と'82 前期	" (テーマ「平 和の思想と教育」)
		a-19	倫理学特殊講義	鹿児島大	育(農、水産、法文) 80/120	'81 ~ 後期	種村完司(平和と倫 理、平和教育の問題)
7	教育学	b-10	教育学演習	都立大	人文 22/24	'83 ~ 通年	山住正巳
		a-20	教育学特講Ⅱ (平和教育)	法政大	全学3、4年生 60/150	'83 ~ 通年	佐貫浩
		a-21	現代教育論	"			
		b-11	社会教育演習	立正大	経1、2年生 200/1400	'79 ~	尾形憲
		a-22	教育心理学(発 達・平和・教育)	和光大	文(全学可) 18/20 人間関係学部	'80 ~ 通年 ? 通年	藤田秀雄 伊藤武彦
		a-23	児童教育学特講 (平和教育論)	愛知県立大	文、児童教育学科	'83 のみ 2単位集中	藤井敏彦(広島大)
		a-24	社会科教育(國 際理解の教育)	鳴戸教育大	院、社会系教育 25/25	'85 ~ 通年	永井滋郎
		a-25	児童音楽	四国女子大	家政、児童学科 22/25	'75頃~通年	(.....)
8	自然科学	a-26	自然科学概論	北星学園大	全学 80/130	'78 通年一部	八木健三
		a-27	技術史	東京工業大	工 70/100	'78 通年一部	飯田賢一
		b-12	総合講義	"	A. 35/35 (1年) B. 8/10 (3年)		"
		a-28	物理学	東海大	理(化学科) 210/210	'80 ~通年	植原道夫
		a-29	一般物理学A (核問題)	九大	工(工業化学科) 210/210	'75 ~	森茂康
		a-30	原子力概論	九州工大	養 50	'83, '85 後期の一部	岡本良治
		a-31	保健理論	明治学院大	工 120/50~150	'84 ~ 半期	片平冽彦 (東京医歯大)
		a-32	公衆衛生概論	大阪大	医療技術短大 156/180	'79 ~	高木昌彦(国) 学外(被爆者2名)
		a-33	医学序説Ⅰ, Ⅱ	"	教養部医進課程 1, 2年 各70/100	'80 ~	"
		a-34	公害論	沖縄大	養 100/130	'85 ~	宇井純、学外2名

### (3) 総合講座(c)

#### ① 概 要

総合講座を実施している17大学例は、表IIのとおりである。

#### 〔コメント〕

\* このうち、神戸大(C-17)は専門学部(教員養成系学部の専門科目)の総合講座として特色があり、その他はすべて一般教育科目としての総合講座である。

\* 全学的に講師が編成されており、教養部をもつ大学においても他学部からの講師を含んでいるものが多い。

\* 学外講師を含む場合が多いが、学外講師のみからなる例もある(C-10)。

\* 同一テーマでの総合講座を3年間にかぎっている大学(C-6)等を除けば、開設いらい継続している大学がほとんどである。

\* 講師の専門分野を「人文」「社会」「自然」の3系列に分けてみると、次のようなになる。ただし、この区分は不正確なものを含んでいる。教育学は人文系列に入れ、社会系列には歴史学が含まれている。

「人文」もしくは「自然」系列の講師を欠くところ、「人文」をも重視しているところなどがある。もちろん、通年と半期との2種類があるから、一概には言えない。

		学内講師数(系列別内訳)	学外講師数
1 北大	☆	6(人文1, 社会3, 自然2)	2(社2)
2 弘前学院短大		不詳(人文1ほか)	?
3 福島大		14(人4, 社7, 自3)	2
4 茨城大		18(人4, 社12, 自2)	0
5 埼玉大		10(人3, 社5, 自2)	3(人2, 自1)
6 中央大		3(人1, 社2, 自0)	2(社1, 自1)
7 関東学院		10(人5, 社5, 自0)	1(自1)
8 名古屋大	☆	6(人2, 社3, 自1)	0
9 中京大		13(人5, 社7, 自1)	1
10 日本福祉大	☆	0	6(社5, 自1)
11 立命館大		4(人0, 社2, 自2)	1(社1)
12 甲南大	☆	10(人1, 社4, 自5)	0
13 広島大		11(人4, 社4, 自3)	2(人1, 自1)
14 九州大	☆	5(人0, 社3, 自2)	1(自1)
15 長崎大	☆	14(人3, 社7, 自4)	0
16 琉球大	☆	10(人0, 社3, 自7)	0
17 神戸大	☆	8(人6, 社2, 自0) 又は8(人4, 社2, 自2)	3

☆印は半期(半年)実施

表II 総合講座

番号	大 学 名	講 座 名	実 施 年 度	学 生 (対象、平均出席者/登録数)	講 師 (世話人 所属 学内・学外)
c-1	北大	平和の学際的研究	1979～ 後期	全学 100/110	大友浩(文)、深瀬忠一(法)、中村研(法)、田中一、森果(経)、山村悦一。太田一男(酪農学園大)。原則として全教官が出席。
c-2	弘前学院短大	現代における女性の生き方	?	家政学科 30/?	米沢紀(人文系)など5名。
c-3	福島大	現代と平和	'84～'86 通年	全学 200/280 (経・教)	堀孝彦、羽田貴史、兼田繁など14名。学外2名。原則として上記3名は通年出席。
c-4	茨城大	20世紀の政治と経済 —平和の問題の総合的解明をめざして—	'83～通年	全学 70/182	伊集院立、雨宮昭一、金原実、守屋孝彦など18名。
c-5	埼玉大	人類と平和 —教育の課題として—	'83～'85 半期 '87 予定	全学: 育、経、養 学部(理工は単位外) 170～80	林量傑など10名。 学外3名。
c-6	中央大	戦争と平和の論理	'82～'84 通年	商法文(昼夜) 200～300	吉沢四郎(商)など3名、学外2名。
c-7	関東学院大	平和研究	'82～通年	経、文 63/125	小南祐一郎など10名、学外1名。 (文2、経7、工1)。
c-8	名古屋大	「現代史と国家—いま平和を考える」	'83～半期	教養(主に文系) 40/60	伊藤忠士(歴)など6名。 (養5、法1)
c-9	中京大	平和論	'84～通年	全学 250/370 (主に1年生)	吉川仁(行政法)など13名。 (養9、法3、商1)、学外1。
c-10	日本福祉大	平和と人権 (経済学特講Ⅱ)	'85～半期	社会福祉、経済 25/225 4/71	学外講師6名(名大4、南山大1、名女短大1)。
c-11	立命館大	軍縮と平和	'84～通年	全学 2教室で分 割講義 II部でも 夏季集中で2単位 分。3～4名の社会人聽講あり。	田中宏道(経)など4名(法、経営、理工各1)、学外1名。
c-12	甲南大	人類と核の諸問題	'84 後期 '85 前期	全学 300/450	藤田晃(理、地学)など10名(理5、文1、法4)
c-13	広島大	戦争と平和にかんする総合的考察	'77～通年	全学 100/170	山田浩(経科)など11名(経科6、法、文、経理、学校教育各1)、学外2
c-14	九大	平和論 日本の安全保障 核を考える	'81 前、後期 '82 後期 '82 前 '83 後 '85 前期	全学 150/250 " " " " " "	森茂康(物理)等5名(養:物理2、国際関係論1、憲法1、法:1)、学外(九大物理)1名。
c-15	長崎大	平和講座	'83～半期	全学 450/900	岩松繁敏(経)など14名(養7、医2、経2、商科短大3)。
c-16	琉球大	核の科学	'84～半期	全学 120/146	武居洋など10名(養1、理3、医3、育2、法文1)。友寄友造(養)、田港朝昭(育)は通年出席。
c-17	神戸大	平和教育	'82 後期 '83～'85 前、後期 '86 後期	育(他学部も可) 150/180	土屋基規など8名(教育)、学外、小中高教師3名。 浜本純逸(国語教育)が毎回の感想文を集約。

② カリキュラム表

C-①-1 北大 (1985年度)

回	月 日	講 義 題 目	担 当 者
1	10/7	ガイダンス	全 員
2	10/14	戦争と平和の政治学	中村研一
3	10/21	南北問題の政治学	"
4	10/28	軍拡の経済学と軍縮の経済学 (1)軍拡による経済成長をめぐって (2)軍縮による経済成長の展望	森 果
5	11/11	科学技術と現代の社会	"
6	11/18	"	田中 一
7	11/25	"	"
8	12/2	地球的規模の環境問題	山村悦一
	12/8	世界平和と南北問題(課外講演)	川田 侃(上智大)
9	12/9	南北問題と平和学	川田 侃( " )
10	12/16	権力非武装の政治学(一)	太田一男
11	1/13	" (二)	"
12	1/20	内村鑑三の平和・非戦論	大友 浩
13	1/27	憲法の平和主義と南北問題	深瀬忠一
14	2/3	"	"
15	2/10	質疑・討論	全 員



\*今回未回答のうち、次の大学でも総合講座が実施されている。  
 津田塾 「学問・平和・人間」 1984年度～ 三浦永光など3名 聴講60～120名  
 山梨大 「核時代と人間」 1981～ 伊東壮など 100  
 " " 「技術と人間」 1985～86  
 岡山大 「国際交流と平和」 1981～ グレン・フックなど  
 6名、学外6名 全学30以下

C-①-2 北大 (1980年度)

回	月/日	講 義 項 目	担 当 者
1	10/6	ガイダンス (全体および各教官) I 経済 1.世界経済の発展基調における世界と平和 -経済学は平和をどのように研究するか- 2.第2次大戦後の経済成長における軍事的要因 -軍事技術と産業技術、軍産複合体制、日本経済の場合-	森 果 (経済学部)
2	10/13		
3	10/20	II 南北問題 1.日本における「平和」の発見 -戦後日本の平和論の特殊性と普遍性- 2.南北問題と「平和」の課題 -現代日本における平和論の思想的転換-	中村研一 (法学部)
4	10/27		
5	11/10	III 教育 序論 教育の課題としての「平和」 -平和教育とは何か- (1)人権としての平和 (2)平和教育の意義と目的 1.平和教育の思想と展開 (1)戦後教育改革における「平和(教育)」の思想 (2)戦後教育の歴史過程における平和教育 -その自覚化と展開- (3)「平和教育」の現段階 -研究の状況と問題点-	山崎真秀 (教育学部)
6	11/17	2.平和教育の課題と実践 (1)日本における平和教育の実践 i) 原爆, ii) 空襲と被災体験, iii) 国際理解の教育 -朝鮮戦争とベトナム戦争をめぐって- (2)平和教育をめぐる反省と展望 -その問題点と今後の課題-	
7	12/1	IV 政治学 国民の安全保障と権力非武装 -権力非武装の現実性に関する考察- 1.現代という時代をどう把握するか 2.現代国家の多様性 3.現代国家の武装 4.軍権力とシビリアンコントロール 5.権力非武装の現実性 6.平和と人権	太田一男 (酪農学園大)
8	12/8	V 思想・文化 内村鑑三の平和思想、その現代的意義 1.内村鑑三の非戦論 2.その後世への影響	
9	12/15		大友 浩 (文学部)
10	12/22		
11	1/19	VI 法学 1.平和の法思想と学問的研究方法 -世界史における平和というものの考え方と役割- 2.日本国憲法下における戦争と平和の諸問題 -平和憲法の原則と現実の諸問題-	深瀬忠一 (法学部)
12	1/26		
13	2/9	VII 総括討論 世界と日本における平和実現のための経済、南北問題、教育、思想、法の総合的考察と具体的方策について参加者(教官、学生)が討議する。	全 員

C-③-1 福島大学 (1985年度)

前期

No.	月/日	講師 (所属学部、専攻)	講義題目	備考
1	4/16	星埜 慎 (経済学部・経済政策)	ヒロシマ・人間・学問	講義全体の説明、教官紹介を行います。 (星埜教授は広島被爆者)
2	4/23		映画「ヒロシマ」 解説:被爆の実相 (堀)	
3	5/7	山崎健一 (原町高校教諭)	被爆体験をほりおこして	学外講師
4	5/14	堀 孝彦 (教育学部・倫理学)	ヒロシマが現代に問いかけるもの	
5	5/21		VTR「予言」 解説:現代の軍拡と核戦争の危機	A.V教室と人文315教室 外人教師 (カナダ)
6	5/28	クリスティーン・ローレル (未定)	市民の目から見た核と平和 (その一)	
7	6/4		" " (その二)	
8	6/11	珠玖拓治 (経・国際経済論)	第三世界と戦争	
9	6/18	新美治一 (経・社会主義憲法)	ソビエト・ロシアの人々と核・軍縮・ 平和 (その一)	
10	6/25	" "	" " (その二)	
11	7/2	渡辺 明 (育・気象学)	VTR「核の冬」 解説:生態系破壊と核戦争 (その一)	
12	7/9	" "	" " (その二)	
13	9/10	大谷明夫 (経・政治学)	核軍縮運動とその歴史 (その一)	
14	9/17	" "	" " (その二)	
※内容・講師・順番等、若干変更の可能性があります。				

後期

No.	月/日	講師 (所属学部、専攻)	講義題目	備考
1	10/8	堀 孝彦 (倫理学・教育学部)	わたしの15年戦争体験と自己形成	
2	10/15	映画観賞	『子供たちの昭和史』	
3	10/22	兼田 繁 (社会学・経済学部)	戦争体験談座論	
4	10/29	深谷富士子	満蒙開拓団と私	
5	11/5	羽田貴史 (教育学・教育学部)	15年戦争とは何か	
6	11/12	同 上	戦争はだれかひきおこしたか	
7	11/19	同 上	戦争に教師はいかに関わったか	
8	11/26	臼井嘉一 (社会科教育学・教育学部)	戦争はいかにおしえられているか	
9	12/3	降矢美弥子 (音楽教育学・教育学部)	平和と音楽家	
10	12/10	安倍 寛 (物理学・教育学部)	原子力エネルギーの利用と原爆	
11	12/17	大木俊夫 (天文学・教育学部)	科学技術と現代の戦争	
12	1/21		冬休みレポート発表会	
13	1/28	堀 孝彦 (倫理学・教育学部)	人間性と平和	
14	2/4	同 上	日本国憲法と平和の思想	

\* 参考文献などは随時紹介します。前期は結構熱心に聞いてくれたと思います。  
ただし、随分、私語が多くかったのには閉口しました。

C-③-2 福島大(1984年度)

No.	月/日	講師(所属学部、専攻)	講義題目
1	4/17	全員	各自挨拶、趣旨説明
2	4/24	堀 孝彦(教・倫理学)	ヒロシマが現代に問いかけるもの 1. 原爆詩をよむ 2. 「予言」を見ながら考える 3. 原爆投下の背景 4. 「核時代」の構造と意味
3	5/8	VTR等	
4	5/15	堀 孝彦	
5	5/22	同上	
6	5/29	安倍 寛(教・物理学)	原子力エネルギーと、その功罪
7	6/5	大木俊夫(教・天文学)	現代戦と科学技術
8	6/12	兼田 繁(経・地域社会学)	戦争がなければ平和か—日本の貧困— 映画「核戦争3分前!—横田基地はいまー」「平和の島・沖縄—沖縄戦は語るー」
9	6/19	スライド等	
10	6/26	珠玖拓治(経・国際経済論)	NIEOと構造的暴力
11	7/3	仲村哲郎(県立安積高校教諭・日本史)	地域の平和運動と平和意識(第3回) 「平和のための郡山の戦争展」のことなど
12	7/10	関係教官(羽田、兼田、堀)	質問に答える(夏休みの課題説明)
13	9/11	大谷明夫(経・政治学)	戦後社会と安保体制(一)
14	9/18	同 上	" " (二)
15	10/9	山田 舜(経・日本経済史・学長)	現代社会と平和
16	10/16	堀・羽田	映画「子どもたちの昭和史」を見て、年表配布
17	10/23	羽田貴史(教・日本教育史)	十五年戦争—その経過と本質—
	10/30		大学祭休講
18	11/6	横山正松(福島県立医大名誉教授・生理学)	私の戦争体験(ハルピン731部隊の支部、北京防疫給水部で生体実験を拒否)
19	11/20	羽田貴史	戦争体験をいかに継承するか
20	11/27	同上	戦争責任論(一)、政治責任論
21	12/4	同上	同上(二)、教育者の戦争責任論
22	12/11	木村幸雄(教・国文学)	戦争と文学
23	12/18	同上	戦後の文学と戦争
	1985年		
24	1/22	堀 孝彦	人間性の発達と被爆者の人格再形成
25	1/29	堀・羽田(司会など)	冬休みレポート発表(学生)
26	2/5	新美治一(経・社会主義憲法)	社会主義と平和
27	2/12	堀 孝彦	平和思想と日本国憲法



## C-③-3 福島大(1986年度)

前期		15年戦争と現代日本の平和	
No.	月/日	講師(専攻、所属学部)	講義題目
1		山田 舜(経済学・経済学部) 映画観賞	ヒロシマと現代―問題提起― 『ヒロシマ』
2		(学外非常勤講師)	戦前の日本と弾圧体験
3		羽田貴史(教育学・教育学部)	戦争体験とは何か―戦後の人間に にとって戦争が持つ意味―
4			15年戦争とは何か(1) ―その経緯ともたらしたもの―
5		羽田貴史	15年戦争とは何か(2) 一人間の 責任と戦争・誰かひきおこしたか―
6		同上	15年戦争とは何か(3) 一人間の 責任と戦争・戦争に教師はいかに関 わったか―
7		同上	「子どもたちの昭和史」
8		映画観賞	戦前日本の社会と民衆(1)
9		木村幸雄(国文学・教育学部)	戦前日本の社会と民衆(2)
10		同上	戦前日本の社会構造と戦争
11		篠笛憲爾(経済学・教育学部)	冬休みレポート発表会
12		星埜 悅(経済学・経済学部)	日本国憲法の成立過程と平和主義 (1)
13		村上 健(法律学・教育学部)	日本国憲法の成立過程と平和主義 (2)
後期		国際社会と現代日本の平和	
15		兼田 繁(社会学・経済学部)	現代日本と安保体制 映画観賞「横田基地 核戦争5分前」
16		渡名喜庸安(地方自治法・経済 学部) (学外非常勤講師)	沖縄の人々
17		新美治一(社会主義憲法・経済 学部)	在日朝鮮人として戦後を生きて ソビエトからみた日本
18		珠玖拓治(国際経済論・経済 学部)	アメリカからみた日本
19		降矢美弥子(音楽教育学・教育 学部)	現代の文化と戦争・平和(1) ―平和と音楽―
20		安倍 寛(物理学・教育学部)	現代の文化と戦争・平和(2) ―原子力エネルギーの利用と原爆―
21		渡辺 明(気象学・教育学部)	現代の文化と戦争・平和(3) ―科学技術と現代の戦争―
22		大木俊夫(天文学・教育学部)	現代の文化と戦争・平和(4) ―科学技術と現代の戦争―
23		兼田 繁 同上	現代日本の民衆生活と平和(1) 現代日本の民衆生活と平和(2) 冬休みレポート発表会
24		晴山一穂(公法学・経済学部) 同上	日本国憲法体系と安保体系(1) 日本国憲法体系と安保体系(2)
25			
26			
27			
28			

## 「20世紀の政治と経済—平和の問題の総合的解明をめざして—」

## ○ 「平和学」とは……

平和な世界を築くために、現代社会の諸問題について人文・社会・自然の諸科学の見地から考察し、多元的な把握を目指す學問—これが平和学なのです。現代は一見平和に見えますが、目を移せば南北問題、環境汚染等問題が山積し、決して「平和」と呼べる状態ではありません。「平和な世界」を実現するために、まず事実の認識から出発し諸問題を科学的に分析、その解決方法を模索していくというのが、この授業なのです。

## ○ 学生の要求として開講されました。

授業設置運動をはじめたのは、人文学部社会科學科一年の仲間数人で結成した「平和学の授業設置を求める会」でした。当時世界的な盛り上がりを見せた反核・平和運動を流行的・情緒的なものに終わらせないために、平和の問題を理論的に学ぼうと立ち上がったわけです。

## ○ この授業を生かすも殺すも私たち次第です。

「平和学」はまさに学生と教官との手づくりの授業と言えます。私たちでつくっていくんだという意識で臨んで下さい。そして、一人一人の専門分野において「平和」の問題を考える契機とし、今後に生かしていきましょう。

▼前期

回	月/日	グループ	担当
1	4/17		雨宮 昭一
2	24		吉田 昭久
3	5/1		"
4	8	人間と平和	今橋 盛勝
5	15		"
6	22		雨宮 昭一
7	29		神尾 達之
8	6/5		"
9	12		本多 敏明
10	19		齊藤 興生
11	26		"
12	7/3	地域と平和	帶刀 治
13	10		"
14	17		前期総括討論会

▼後期

15	9/4	東西対立と依存	荒井 信一
16	11		大江志乃夫
17	18		"
18	10/16		野田二次男
19	23		金原 實
20	30		守屋 孝彦
21	11/6	南北問題	館山 豊
22	13		"
23	20		菊池 稔史
24	27	平和の構想	田村 武夫
25	12/4		井上 英夫
26	11		"
27	18		伊集院 立
28	1/8		村中 知子
29	22		後期総括討論会

## C-④-2 茨城大(1983年度)

▼前期

回	月/日	グループ	担当	学部	テ　ー　マ
1 2	4/13 20	人間と平和	雨宮 昭一 " " 吉田 昭久 " 今橋 盛勝 " "	教養 " 教育 " 人文	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平和学への視点</li> <li>・社会の解体再編成と軍事化</li> <li>・社会の再建と非軍事化</li> <li>・人間の攻撃性</li> <li>・人間の攻撃性とコントロール、教育</li> <li>・平和教育の意味</li> <li>・平和教育の現実</li> </ul>
3	5/27				
4	5/4				
5	5/11				
6	5/18				
7 8 9 10 11	6/25 6/1 8 15 22	平和運動の動主体	田村 武夫 伊集院 立 " " 丸本 隆 野田二次男	人文 教養 " 人文 理	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国際法上の戦争と平和</li> <li>・戦争の処理と平和</li> <li>・" "</li> <li>・西ドイツの平和運動</li> <li>・自然科学者の平和運動</li> </ul>
12 13	7/29 7/6	南北問題	石島 紀之 " "	人文	<ul style="list-style-type: none"> <li>・南北問題の歴史</li> <li>・" "</li> </ul>
14	8/13	前期・総括討論会			
補講 15・16	7/20		大江志乃夫	人文	・軍縮と有事立法

▼後期

回	月/日	グループ	担当	学部	テ　ー　マ
17 18 19 20	9/7 14 10/12 19	南北問題 —歴史・資源・環境・防災	藤井陽一郎 " " 浜野 英一 " "	理 " 理 " "	<ul style="list-style-type: none"> <li>・災害史にみる平和の課題</li> <li>・" "</li> <li>・資源と環境汚染からみた南北問題</li> <li>・" "</li> </ul>
21	9/26		藤村 通	教養	<ul style="list-style-type: none"> <li>・財政と平和</li> <li>一日露戦争から第2次世界大戦まで</li> <li>・" "</li> <li>・軍拡と行革</li> <li>・" "</li> </ul>
22 23 24	11/2 9 16		田中 重博	人文	
25 26 27 28	12/30 12/7 14 21		村中 知子 " " 守屋 孝彦 " "	教養 " 教養 " "	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報社会としての日本の特質</li> <li>・" "</li> <li>・平和と統治構造</li> <li>・" "</li> </ul>
29	1/11	後期・総括討論会			

「日本の科学者」VOL.18, No.8, Aug.1983より

## C-⑤-1 埼玉大学(1985年度)

回	月・日	主　題	副　題　(案)	担当者(所属・専攻等)
1	4・11	私の戦争体験と研究・教育		稻垣信夫(本学部・数学)
2	4・18	歴史と平和		森田　武(　"　・日本史)
3	4・25	経済と平和		島岡光一(　"　・経済)
4	5・2	環境問題と平和		四元忠博(本学経済学部・経済)
5	5・9	創作活動と平和	俳句をどうして 美術(構成)をどうして	金子兜太(俳人)
6	5・16	"	音楽をどうして	藤川喜也(本学部・美術)
7	5・23	"	核問題	林　光(作曲家)
8	5・30	科学技術と平和	平和利用と軍事利用	安斎育郎(東大・放射線防御学)
9	6・6	"		都築正信(教養部・数学)
10	6・13	法と平和		未定
11	7・4	国際関係と平和		吾郷真一(教養学部・国際関係論)
12	7・11	教育と平和	国連の活動	林信二郎(本学部・幼児教育学)
13	7・18	"		川口幸宏(　"　・教育方法)
14	9・19	まとめ	パネルディスカッション	本学教官

\*「本学部」=教育学部

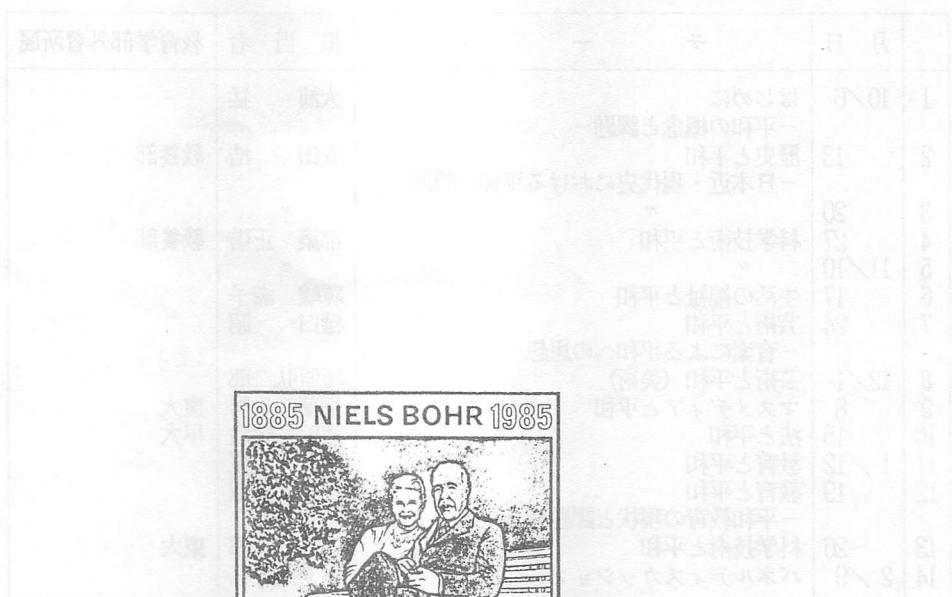
## C-⑤-2 埼玉大学(1983年度)

	月　日	テ　ー　マ	担　当　者	教育学部外者所属
1	10/6	はじめに -平和の概念と課題-	大浦　猛	
2	13	歴史と平和 -日本近・現代史における平和の問題-	安田　浩	教養部
3	20	"	"	
4	27	科学技術と平和	都築　正信	教養部
5	11/10	"	"	
6	17	生活の福祉と平和	暉嶺　淑子	
7	24	芸術と平和 -音楽による平和への思想-	樋口　昭	
8	12/1	芸術と平和(美術)	櫻原弘二郎	
9	8	マスメディアと平和	稻葉三千男	
10	15	法と平和	浦田　賢治	東大 早大
11	1/12	教育と平和	清水　寛	
12	19	教育と平和 -平和教育の現状と課題-	林　量淑	
13	26	科学技術と平和	安斎　育郎	東大
14	2/9	パネルディスカッション	学内教官	

C-⑤-3 埼玉大学(1984年度)

月日	テ ー マ	担当者	教育学部外者所属
1 4/12	はじめに	大浦 猛	
2 19	歴史と平和	森田 武	
3 26	科学技術と平和	都築 信	教養部
4 5/10	"	安斎 育郎	東大
5 17	経済と平和	島岡 光一	
6 24	生活の福祉と平和	暉峻 淑子	
7 6/1	法と平和	浦田 賢治	早大
8 7	国際関係と平和	吾郷 真一	教養学部
9 14	芸術と平和	樋口 昭	
10 21	"	榎原 弘二郎	
11 28	教育と平和	林 量倣	
12 7/5	"	清水 寛官	
13 12	パネルディスカッション	学内教官	

(C-⑤-2と3は、『教育学研究』52巻1号、1985年3月より)



C-⑥ 中央大学（1982～84年度）

講義 担当	1	2	3	4	5	まとめ	
吉沢四郎	4月13日	シンポジウム (担当者全員)					
古川 純	4月20日	4月27日	5月11日	5月18日	5月25日	6月1日	学外講師
高柳先男	6月8日	6月15日	6月22日	6月29日	7月6日	7月13日	
服部 学	9月21日	9月28日	10月5日	10月12日	10月19日	10月26日	学外講師
石黒英男	11月9日	11月16日	11月30日	12月7日	12月14日	12月21日	
担当全員	12月21日	シンポジウム					

戦後日本が、新しい社会の指導原理とした平和主義は、80年代に入り、米ソの核軍備競争、先進国から途上国への核をふくむ近代兵器の拡散、レーガン政権の軍備増強政策、それに沿ったわが国の軍備増強政策の推進などにより、いま崩壊の危機に直面しているといえます。

総合講座では、現代の戦争の論理と平和の論理を問い合わせ、日本のみならず世界に平和主義の原理を確立する道を探ろうとするものです。反動化の時代こそ、われわれは「戦争と平和」を冷静に考えなければならないのです。

序 論（昼・夜）

吉沢 四郎

総合講座運営委員の私は、この講座の責任者として、はじめにこの講座設定のねらい、総合講座の学習方法などを説明します。またシンポジウムの司会を担当して、スムーズな運営をはかり、諸君と共に、現代の戦争と平和の論理を追求したいと考えています。

〔方針〕日本国憲法は、「平和」を人権として保障する方針を打ち出した世界で初めての憲法である（「平和のうちに生存する権利」）。人権の享有にとって「平和」は、実に重要な前提である。戦時や非常事態の名目の下で、人権の広はんな停止、制限、はく奪が行われてきたことは、これまでの歴史が例証している。日本国憲法は「平和」を人権として保障することの具体的なあらわれとして、戦争の放棄、軍事力の不保持、交戦権の否認を定め、さらに戦争に関する規定を置かず、戦時や非常事態における措置の規定をも有していない。また、国防の義務や徴兵制に関する規定を持っておらず、徹底した非戦・非武装主義を選択したことを示している。

講義では、こうした憲法の基本原理の意義を明らかにし、今日、有事立法問題や改憲問題のなかであいまいにされがちな憲法管理をしっかりと把握するよう試みたいと思う。

〔内容〕

- I はじめに—沖縄戦と日本軍
- II 憲法第9条と平和的生存権保障の意義
- III 日本の軍事法—有事立法と人権制限
- IV 軍事機密
- V むすび—良心的戦争拒否運動・無防備地域運動・非核都市宣言運動と市民

〔テキスト〕 小林直樹『憲法第九条』岩波新書 1982年

〔参考書〕 軍事問題研究会編『有事立法が狙うもの』三一書房 1978年  
福島新吾編『軍事法ハンドブック』日本評論社 1983年刊行予定

現代国際社会における戦争と平和の問題を、できるだけ具体的かつ理論的に検討するつもりである。下記に掲げたテキストは、最小限必要な知識を得るためにものであって、受講前に読んでいただきたいと思う。

〔テキスト〕 「戦争の社会学」 中大出版部 1,900円  
「平和学」 早大出版部 2,000円

〔方針〕 強い核戦力を持っていれば、それが抑止力となって戦争はおこらない。核兵器は実際には使えない兵器であるという考え方がある。しかし今日、核兵器は決して使えない兵器ではなく、核戦争を戦うための兵器として考えられていることを、できるだけ具体的な事実にもとづいて明らかにし、軍備によって安全保障を高めるのではなく、軍縮によって安全保障を保つときが来ていることを理解してもらえるようにして行きたい。

〔内容〕

1. 核兵器の出現とその後の発達

大量殺りく兵器として原子爆弾、水素爆弾の持つ意味について考える。

2. 核軍拡競争の実態

核兵器体系の発達により、核軍拡競争が質の競争に変ってきてている実態について述べる。

3. 核戦争の効果

核戦争が起こった場合、どのような被害が生じうるかを説明する。

4. 核戦略と核戦争

核戦争の脅威が現実のものとなってきている状況を明らかにする。

5. 核軍縮への道

核兵器廃絶にむけて何をしてきたか、何ができるかを検討する。

〔参考書〕 服部学著『核兵器と核戦争』 大月書店 1,200円

ナイジェル・コールダー著、服部学・坪井主税訳『核戦争の悪夢』

みすず書房 1,800円

戦争と知識人（昼・夜）

石黒 英男

第二次世界大戦中にドイツのある詩人は亡命地にあって次のような詩を書いた。

「將軍よ、きみの戦車は強力なものだ。／森の木々を轢きたおし、百の人間を踏みにじる。／が、それにも欠点がひとつある。／それには乗り手が必要だ。／將軍よ、きみの爆撃機はすごい。／爆風よりも速く飛び、象よりも積載力がある。／が、それにも欠点がひとつある。／それには整備員が必要だ。／將軍よ、人間はいかにも役にたつ。／飛ぶこともでき、殺すともできる。／が、かれにも欠点がひとつある。／かれは考えることができるのだ。」

ここには、ほんらいあるべき＜知＞の機能と戦争の関係があざやかに示されている。こうした＜関係＞の問題性を、独自の思想と行動をもって戦争に対峙した数人の作家と画家の仕事をとりあげてさぐってみたい。

〔内容〕

1) 第一次世界大戦は作家たちにどのような衝撃をあたえたか？

2) ファシズムの抬头と戦争の危機にたいして知識人たちはどうにかかわっていったか？ アムステルダム＝ブレイエル運動から文化擁護国際作家会議へ。

3) 第二次世界大戦のさなかで——トーマス・マンとベルトルト・布莱ヒトの場合。

4) 戦後の世界構造のなかで。

〔参考書〕 やや難解だが、『スヴェンボルの対話』（野村修著・平凡社刊 1,100円）

の一読をすすめたい。なお、『ロマン・ロラン』（新村猛著・岩波新書

320円），『反体制の芸術』（坂崎乙郎著・中公新書 360円）などにも眼をとおしておくとよい。

C-⑦ 関東学院大（1985年度）

4月15日・22日	平和研究・現状と課題	小南祐一郎
5月13日・20日	国際機構の変遷	加藤 俊作
5月27日・6月3日	「平和憲法」	野村 稔
6月10日・17日	平和運動の系譜	杉田 正樹
6月24日・7月1日	兵器産業と兵器輸出	富山 和夫
7月8日・15日	平和の哲学	山田 宗睦
10月7日・14日	世界の食糧問題	W.D.スマイリー
10月21日・28日	南北問題	佐伯 尤
11月11日・18日	現代戦と軍縮	服部 学
11月25日・12月2日	“言論の自由”と戦争	滝沢 正樹
12月10日・17日	宗教と平和	細川 道弘

C-⑩ 日本福祉大（1985年度）

講義のねらい

人間が幸せに生きていくために、もっとも大切な条件は、平和と人権が保障されていることである。人間の歴史はまさに平和と人権をおびやかす者とのたたかいの歴史であった。しかし平和がなければ人権は保障され得ないし、人権が保障されていなければ平和をまもることもできない。このように平和と人権は互いに深く結びついている。

本特講は、この平和と人権をめぐる諸問題を、6人の講師の分担により、その歴史と現状と未来、そして自然科学者の立場および国際的視野から、さまざまな角度で探究していくことをねらいとしている。

各講師の分担は、つきのとおりである。

4月12日・19日	戦前	森 正	名古屋女子短大（政）
4月26日・5月10日	戦後	小林 武	南山大学（法）
5月17日・5月24日	現状	森 英樹	名古屋大学（法）
5月31日・6月7日	自然科学者の立場から	沢田昭二	名古屋大学（物理）
6月14日・6月21日	未来	大川睦夫	名古屋大学（法）
6月28日・7月5日	国際的視野から	松井芳郎	名古屋大学（法）

1. 授業時間： 火曜日第1時限（8:40～10:10）

2. 対象学生： 主に文科系2年生（理系も受講可）

3. 授業予定

10月22日： オリエンテーション

記録映画「語られなかった戦争—侵略

—中国で日本軍は何をしたか』上映

10月29日： 15年戦争と現代 伊藤 忠士

11月5日： 同 上

11月12日： 戦後沖縄の矛盾と対抗 助川 徳是

11月19日： 同 上

11月26日： 安保体制と日本の平和 松井 芳郎

12月3日： 同 上

12月10日： 日本の軍事費 近藤 哲生

12月17日： 同 上

12月24日： 核戦略体制 柏村 昌平

1月14日： 同 上

1月21日： 戦後40年の思想状況 土方 和雄

1月28日： 同 上

2月4日： 試験実施

4. 読書レポートの提出：右記の課題図書〔「Ⅱ、2、(3)総合講座のテキストまたは参考文献など」の名の大の項を参照〕のうち、Aグループ・Bグループの中から各1点選び読書レポートを1月28日までに提出すること。レポートと試験により、成績評価を行う。



	開講日	講義内容	担当者
1	4月23日	講座の趣旨説明・導入	実行委
2	30日	核戦争の危機と人類	杉江栄
3	5月7日	国連と軍縮	"
4	14日	社会主義国における軍事費	塚野本崎
5	21日	経済の軍事化Ⅰ	"
6	28日	" Ⅱ	"
7	6月4日	人間と攻撃行動	桑三高 村上田
8	11日	平和と文化	"
9	18日	第二次世界大戦の原因と結果Ⅰ	桑三高
10	25日	" Ⅱ	"
11	7月2日	軍国主義教育と平和教育Ⅰ	五十嵐
12	9日	" Ⅱ	"
13	9月10日	憲法と恒久平和主義Ⅰ	松本
14	10月1日	" Ⅱ	"
15	8日	(未定)	学外講師
16	15日	平和の思想Ⅰ	高田
17	22日	" Ⅱ	"
18	29日	戦争と平和の法	樋木
19	11月5日	独ソ戦と文学Ⅰ	木村
20	12日	" Ⅱ	"
21	19日	体育と平和	滝村
22	26日	第二次大戦後の戦争と平和に対する脅威Ⅰ	今村
23	12月3日	" Ⅱ	"
24	10日	日本の安全保障と平和	実行委
25	17日	総括Ⅰ	"
26	1月14日	" Ⅱ	"



C-⑨-2 中京大(1984年度)

	講義内容	担当者(専攻等)	位置づけ等
1	講座の趣旨説明・導入(映画上映)	実行委・吉川	本講座全体の位置づけ、その他(『予言』上映)。
2	核戦争の危機と人類	杉江栄(政治)	平和に対する脅威をもたらす世界の諸状況とそれに対する対策を学ぶための世界の諸運動(含、日本)の現状をみる。さらに、その中で国際的機関の果すべき役割と、果している役割をも考察する。
3	軍拡の歴史	"	
4	戦争と平和の法	樺木(国際法)	
5	国連と軍縮	杉江栄	
6	南北問題(第三世界への進出と平和)	未定	平和に対する脅威をもたらす他のいくつかの要因(ex.8は人間行動の特質を生物学的に分析する立場から)。
7	エネルギー・食糧問題と平和	未定	
8	人間と攻撃行動	桑村(生物)	(以上1~10は主として、現代の平和をめぐる様々な問題状況にスポットをあてているものと考える)
9	経済の軍事化I	野崎(経済)	
10	" II	"	
11	歴史上の戦争の原因と結果(第二次大戦を中心とする)	高田(歴史)	これまでの戦争、とりわけ第二次大戦を中心にその原因を探り、また、そこでの戦争の現実を知る。
12	庶民と戦争(文化・生活史等)	三上(教育)	(11は総論的位置をもち、12, 13は各論的位置をもつ。14, 15は戦争の現実にスポットをあてる。)
13	軍国主義教育と平和教育	五十嵐(教育)	(以上11~15は過去の戦争を省み、その現実を浮きぼりにすることによって、平和のもつ意味を考えさせるものといえる。)
14	戦争と人間I	古賀(文学)	
15	憲法と恒久平和主義I	吉川(法学)	第二次大戦の結果を省み生み出された平和憲法のもつ意味と内容を知る。また、平和の思想及びいくつかの分野にあらわれた戦争と平和にかかわる問題をみる。
16	" II	"	
17	戦争と人間II	学外者講演	
18	平和の思想I	高田(歴史)	
19	" II	"	(以上15~21は、平和と戦争にかかわる様々な考え方、思想等を学びつつ現行憲法のもつ平和に対する価値観を再確認することを主眼とする。)
20	独ソ戦と文学	木村(文学)	
21	体育と平和(体育の目的と平和)	滝(体育)	
22	現代の戦争はどう聞われるかI (原子力の基礎)	未定	再び、戦争と平和をめぐる現実を認識する。現在なお存続する平和への脅威と、それに対して平和維持のための諸条件を考える。その中で、世界の中での日本のあり方、さらに私達自身の生き方についても考える。
23	" II (核兵器)	村井(物理)	(1~10では平和をめぐる現状を知り、11~21では戦争の現実と平和のもつ意味を考えた。22~29ではこれまでの講義で深められた平和にかかわる認識を再び現実の中で、いかに主体化すべきかを考える機会とする。)
24	" III (化学兵器)	田村(化学)	
25	" IV (情報戦争)	未定	
26	第二次大戦後の戦争と、平和に対する脅威 I(キューバ危機ほか)	今村(政治)	
27	" II (中東戦争ほか)	"	
28	日本の安全保障と平和	"	
29	総括I(講座全体のまとめ)	実行委・吉川	
30	総括II(含、アンケート)	"	本講座全体のまとめ



30 전 DPR KOREA 조선우표

山口 正之  
貞広 太郎  
菊井 禮次  
慈道 裕治  
田中 宏道

(A) 科目の概要

最近10年間の世界の軍事費は1974年ドル価を基準にして約1000兆円といわれるように軍拡は米ソを先頭に発展途上国をもまき込んでさまざまの勢いで進んでいる。昨年来話題になっている巡航ミサイルの配備はその典型であるし、我国でも最近の軍事費の急増は目をみはるものがある。

また国際紛争も中近東や中米、アフリカ、カンボジアでは現実に戦火をまじえているし、その他きわめて緊張した状態にある地域も数多く存在している。また我国も「日米運命共同体」論にみられるように、米軍の世界戦略に組み込まれて自衛隊と米軍の一体化が急激に進行している。

この軍事的緊張の高まりは、各国の経済的発展の足かせになっているし、また政治的にも民主主義に逆行する最大の要因になっている。また個人の生活にとっても、多くのあたら有為の人材が軍隊生活という非生産的部所にしばりつけられ、もって生まれた天性の發揮をおしとどめられている。ましてや万一第三次世界大戦にでもなれば人類絶滅の危険性まで生じている。

こういった状況のもとで世界的規模で反核・軍縮の闘争がもりあがりつつある。本学は平和と民主主義を教学理念としているが、上記のように我国にとっても、人類全体にとっても急務となっている軍縮と平和の問題についての教育はきわめて重要な課題であるし、このことはまた本学の学生諸君が将来社会で要請される国際的視野にたった判断能力養成の一助にもなると思われる。

この科目では軍拡と紛争の現状、その原因、日本をめぐる状勢、問題解決の道等の問題を、軍事技術、経済、政治、平和のための闘いといった面から多面的・総合的に解明しようとするものである。

(B) 講義内容と計画

序論 戰争と人間（貞広）

私の戦争体験

1. 現代科学技術と戦争（慈道）

①科学技術の平和利用と軍事利用

②核の脅威

③核時代とラッセル・AINシュタイン原則の人類史的今日的意義

④戦争と科学者の社会的責任

2. 戰争と経済（田中）

①現代帝国主義と世界の軍事同盟

- ②第三世界における紛争と核戦争
  - ③産軍複合体
  - ④日本の海外進出と総合安保
3. 日米安全保障条約をめぐる法と政治（菊井）
- ①憲法と非核三原則問題
  - ②改憲・有事立法問題
  - ③安保問題の現段階と安保再改訂論
4. 軍縮と反戦・反核運動（山口）
- ①原水禁運動の歴史と現状
  - ②国連の平和維持機能とポストSSD II
  - ③世界に広がる草の根・反核平和運動の現状と課題
  - ④今日の大学の使命と軍縮・平和教育の課題（軍拡のイデオロギー批判を含めて）

C-⑫-1 甲南大学（1985年度）

講義日	担当者	講義内容
(前期)		
4. 19	藤田 晃 (理)	映画「人間をかえせ」上映
4. 25	"	核兵器とその運搬手段
5. 10	山本 嘉昭 (理)	放射線・放射能と原子核
5. 17	道之前允直 (理)	生物に対する放射線の作用
5. 24	伊藤 順吉 (理)	原子力の平和利用
5. 31	坂田 通徳 (理)	核兵器と科学者の社会的責任
6. 7	斎藤 豊治 (法)	映画「予言」上映
6. 14	畠村 繁 (法)	非核三原則と日米安保条約
6. 21	"	核兵器と国際法
6. 28	斎藤 豊治 (法)	核問題と機密保護
7. 5	長渕 満男 (法)	原子力産業における労働災害
9. 13	高阪 黒 (文)	原爆と文学
9. 20	丸田 隆 (法)	アメリカの核実験と被爆訴訟

C-⑫-2 甲南大学（1984年度）

講義日	担当者	講義内容
1984年		
10.12	藤田 晃	映画「人間をかえせ」上映と核運搬手段
10.19	山本 嘉昭	放射線・放射能と原子核
10.26	道之前允直	生物に対する放射線の作用
11.2	伊藤 順吉	核兵器と原子力平和利用
11.9	坂田 通徳	核兵器と科学者の責任
11.30	畠村 繁	映画「予言」その他上映
12.7	藤田 宏郎	核抑止論
12.14	畠村 繁	核兵器と国際法
12.21	丸田 隆	アメリカの核実験と被爆訴訟
1985年		
1.11	斎藤 豊治	核問題と機密保護
1.18	長渕 満男	原子力産業における労働災害
1.25	高阪 黒	原爆と文学

講義題目	講 義	内 容	等
戦争と平和に関する総合的考察 (実施責任者) 山田(皓)教官	戦争と平和について、主に社会科学の観点から総合的に考察し、この問題に関する歴史的、科学的認識を深めることをめざす。		
前期		(教官名)	(所属)
1. 平和の思想 (1)	芝田	総合科学部	
2. " (2)	"	"	
3. 日本人の平和意識 (1)	松尾	平和科学研究センター	
4. " (2)	"	"	
5. 日本の戦争・日本の平和 (1)	森(祐)	"	
6. " (2)	"	"	
7. 平和学の現状と展望 (1)	岡本(三)	四国学院大学	
8. " (2)	"	"	
9. 核軍拡競争の現状と問題点 (1)	山田(皓)	総合科学部	
10. " (2)	"	"	
11. 軍縮問題の再検討 (1)	"	"	
12. " (2)	"	"	
13. 核エネルギーと平和 (1)	桜井	理学部	
14. " (2)	"	"	
15. 試験およびアンケート			
後期			
1. 人口・食糧問題と平和 (1)	倉石	総合科学部	
2. " (2)	"	"	
3. 第三世界と平和 (1)	佐藤(幸)	平和科学研究センター	
4. " (2)	"	"	
5. 開発問題と平和 (1)	山下(彰)	経済学部	
6. " (2)	"	"	
7. 中国問題と日本の平和 (1)	小林(文)	総合科学部	
8. " (2)	"	"	
9. 被爆者問題 (1)	庄野	広島女学院大学	
10. " (2)	"	"	
11. 平和教育について (1)	藤井(敏)	学校教育学部	
12. " (2)	"	"	
13. 世界の平和とヒロシマの意味	松元	文学部	
14. 試験およびアンケート			



〔目次〕

第1章 平和の思想	芝田進午
第2章 平和学の動向	岡本三夫
第3章 戦争の起源について	森 祐二
第4章 平和研究の発展	関 寛治
第5章 戦後の核軍拡競争とその問題点	山田 浩
第6章 軍縮問題の展開	森 利一
第7章 原発と原爆の技術論的考察	桜井醇児
第8章 食糧問題と平和	倉石 晉
第9章 南北問題と平和	森 利一
第10章 中東平和問題	栗野 凤
第11章 中国問題と日本の平和	横山 英
第12章 原点としてのヒロシマ	松元 寛
第13章 原水禁運動の略史と問題点	北西 尤
第14章 平和教育	藤井敏彦
第15章 核時代と人間	庄野直美

〔同書「はしがき」より〕

まず第1に、平和の思想史的系譜の考察、平和の科学的研究の方法論的検討をおこなった。この際とくに、欧米における平和学の現状と問題点を明らかにし、ヒロシマ・ナガサキの理論化を模索した（第1章～第4章）。

第2に、核軍拡競争とその対極にある軍縮問題について、その歴史的および現状の分析をおこなった（第5章～第6章）。

第3には、核エネルギー、人口・食糧、南北問題、中国問題など、今日の平和的課題にとって核問題とともに重要な、今後ますますその重要性を増すであろう政治経済的諸問題について扱った（第7章～第11章）。

第4に、原水爆禁止、平和教育など、今日平和運動の直面する重要問題を取り上げ、最後にこれまでの考察の締めくくりの意味で、平和の原点としてのヒロシマの意味や問題点について、従来の常識化されたものに拘束されることなく、いささか大胆な提言を述べておいた（第12章～第15章）。

## C-⑭-1 九州大学(1985年度)

1985年度前期

講座名	担当者	講義内容	学部	学年	履修者数	受験者数
核を考える	○森 茂康 中山 正敏 石川 捷治 (法学部) 岡本 良治 (九大工) 高田 和夫 横田 耕一	1. 総論 2. 原爆と科学者、科学者の社会的責任 3. 核兵器の現状 4. 核戦略 5. 核兵器の効果 6. 反核運動・核軍縮	文・理	1, 2年	250名	199名

## C-⑭-2 九州大学(1981~83年度)

1981年度前期 後期

平和論	高田 和夫 横田 耕一 志垣 嘉夫 小野沢正喜 花田 伸久 森 茂康	核戦争の危険性が、かつてなく高まっている。人類の存続を脅かすものであるにもかかわらず、平和の問題は国際、民族宗教、イデオロギーあるいは東西・南北間の問題として、はたまた資源・エネルギー問題等、広範かつ複雑で困難な問題である。 これは平和を考える一つの試みである つきの講師とテーマを予定している。 高田和夫：軍縮を考える 横田耕一：法による平和の保障 志垣嘉夫：第2次世界大戦の戦後処理に関する問題 小野沢正喜：異文化理解と平和 花田伸久：平和を求める際の一つの条件 森 茂康：核と平和	文・理 学部	1, 2年	前630期	508名
					後296期	155名

1982年度前期

核を考える	西嶋 有厚 (福岡大) 森 茂康 高田 和夫	広島・長崎を原点として、核は人類を破滅へと導いたのに、いまだに人類はそれから逃れるすべを見出しが出来ない。この核の問題のうち、 (1)原爆投下の眞の意図は何であったか (2)原爆体験者の告発(学外講師) (3)核兵器の現状と核戦略 (4)核軍縮 (5)原子力発電について考える。	文・理	1, 2	938	605
-------	---------------------------------	--	-----	------	-----	-----

1982年度後期

日本の安全保障	志垣 嘉夫 小野沢正喜 横田 耕一 刀田 和夫 石川 捷治 (法学部)	政府は防衛力増強と日米軍事協力による安全保障をすすめている。しかし第2次大戦時と全く異なる、核兵器の出現と政治・経済の集中、膨大な資源の海外依存等の日本の状況は旧来の軍事的防衛思想を根底からくつがえす。いくつかの視点から日本の安全保障を考える。	文・理	1, 2	324	67
---------	--	--	-----	------	-----	----

1983年度後期

核を考える	○森 茂康 横田 耕一 中山 正敏 刀田 和夫 石川 捷治 (法学部) 高田 和夫	1. 総論(学生の平和意識) 2. 原爆と科学者・科学者の社会的責任 3. 原子力発電 4. 核兵器の現状 5. 反核運動・核軍縮 6. 核戦略論 7. 核兵器の効果 8. 核兵器体系における日本の役割 (映画)	文・理	1, 2	298	148
-------	---	--	-----	------	-----	-----

C-⑯ 長崎大学 (1985年度)

分野	授業科目 (担当教官)	開講			授業内容
		単位	曜限	対象学部	
総合科学	平和講座 (岩松繁俊) (柴田昇) (岡島俊三) (西森一正) (藤沢秀雄) (佐久間正) (高賀康穂) (浜崎一敏) (生野正剛) (姫理順一) (柳沢旭) (鎌田英三) (西嶋法友) (高倉泰夫)	2	Aコース 金 III  Bコース 金 IV (前)	全	<p>1945年8月9日午前11時2分、アメリカのプルトニウム爆弾が長崎市松山町の上空で核分裂し、数知れぬ人びとが命を奪われ、辛うじて生き残った被爆者も(被爆二世でさえ)いまなお原爆症に苦しんでいる。これらのこと実は、いまや世界中のひととの共通の認識対象となり、広島・長崎は核による人類と地球の破滅を憂慮する良心的な人びとの思考と行動の“原点”となっている。とりわけ被爆40周年にあたる今年の“原点”長崎にたいする世界の期待は大きいといわなければならない。</p> <p>人類と地球の破滅の危機は、核戦争のみならず、とどまるところを知らない軍備拡張競争、さまざまな人権無視と差別、武力的経済的強者による収奪と貧困・飢餓、視野狭小の利己的生産活動による資源と環境の破壊によって、確実に進行している。</p> <p>本講座は、これらのテーマをすべてとりあげるだけの時間的余裕をもたないので、日本帝国主義の近隣アジア諸国への長期にわたる侵略戦争と原爆被爆の惨禍を中心として論じ、人類と地球とを愛する清純で探究心に富む学生諸君の思索と生活の原点に資すべく基礎的資料と基本的な分析論理を提供するものである。</p> <p>過去2年間の経験を省みると、単位取得のみを目的として、講義への出席と真面目な学習・思索を怠る学生の数はけっして少なくなかった。今後本講座はこのような学生にたいしてきびしい対応をしてゆくものとする。</p> <p>授業項目</p> <p>(Aコース)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>I アンケート 序論</li> <li>II 歴史における日本と朝鮮との関係</li> <li>III 日本帝国主義の形成と軍国主義</li> <li>IV ナチズムの形成と民族差別</li> <li>V 差別と戦争</li> <li>VI 民衆と戦争</li> <li>VII 平和憲法の理念と現実</li> <li>VIII 核兵器と原発の物理学的原理</li> <li>IX 核兵器と放射線</li> <li>X 原爆症の医学</li> <li>X I 核兵器体系と核戦略</li> <li>X II 軍拡競争と飢餓</li> </ul> <p>(Bコース)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>I アンケート 序論</li> <li>II ナチズムの形成と民族差別</li> <li>III ナチズムの文芸政策</li> <li>IV 治安維持法と15年戦争</li> <li>V 平和憲法の理念と現実</li> <li>VI 差別と戦争</li> <li>VII 核兵器と原発の物理学的原理</li> <li>VIII 核兵器と放射線</li> <li>IX 原爆症の医学</li> <li>X 朝鮮人被爆者</li> <li>X I 戰争と飢餓</li> <li>X II 核兵器体系と核戦略</li> </ul> <p>参考書：参考文献は講義の過程で適宜指示し、教材は適宜配布する。とりあえず1冊だけ参考文献をあげておく。ジョナサン・シェル「地球の運命」(斎藤・西俣訳)、朝日新聞社、1982</p>

## C-⑩-1 琉球大学(1985年度)

章	月 日	概 要	担 当 者
1	4月18日	プレテスト、映画「人間を返せ」上映 被爆の実相と被爆者のいのち、こころ、くらし	武居 洋
2	4月25日	核の原理と核開発の歴史	矢ヶ崎克馬
3	5月2日	"	"
3	5月16日	核戦争と環境	友寄 友造
4	5月23日	核兵器体系と核軍拡競争	堺 英二郎
5	5月30日	米ソのブロック政策と核戦略	若尾 祐司
6	6月6日	非核三原則と非核武装地帯	"
7	6月13日	原子力発電について	外間 宏三
8	6月20日	沖縄における平和(反戦)思想の展開 —沖縄戦体験と戦後沖縄史を通して—	田港 朝昭
9	6月27日	日本・沖縄の軍事基地	竹田 秀輝
10	9月5日	戦争の経済的要因 核軍拡経済の自己増殖	"
11	9月12日	核軍縮の理念と現実 一人類の生存の危機に直面して—	武居 洋
12	9月19日	戦争・原爆の追体験	石津 宏
13	9月26日	核戦争の影響に関するWHOの勧告	平良 一彦
14.	10月3日	パネルディスカッション ポストテスト	担当者全員

※ 授業時間外の企画として、基地・戦跡巡検を計画しております。

※ テキスト 「核と沖縄」 550円 生協で販売

## C-⑩-2 琉球大学(1986年度)

月 日	回	概 要	担 当 者
4月17日	1	映画「もし地球を愛するなら」上映 核の原理と核開発の歴史	賀数 清孝
4月24日	2	核兵器体系と核軍拡競争	堺 英二郎
5月1日	3	核の原理	賀数 清孝
5月8日	4	広島・長崎の被爆者と原水禁運動	武居 洋
5月15日	5	原子力発電について	渡久山 章
5月29日	6	核戦争と環境	友寄 友造
6月5日	7	非核三原則と非核武装地帯	若尾 祐司
6月12日	8	沖縄における平和(反戦)思想の展開 —沖縄戦体験と戦後沖縄史を通して—	田港 朝昭
6月19日	9	核軍縮の理念と現実 一人類生存の危機に直面して—	武居 洋
6月26日	10	戦争・原爆の追体験	石津 宏
9月4日	11	核戦争の影響に関するWHOの勧告	平良 一彦
9月11日	12	世界における核軍拡競争の脅威と日本・沖縄における核最前線拠点基地化の急進点	竹田 秀輝
9月18日	13	核軍拡競争の経済的諸要因	竹田 秀輝
9月25日	14	パネルディスカッション	担当者全員
10月2日	15	テスト	

※ テキスト 「核と沖縄」 550円 生協で販売しております。

※ 授業時間外の企画として、基地・戦跡巡検を企画しております。

## C-⑦-1 神戸大学 教育学部 (1985年度前期)

題 目	月 日	担当教官
<b>一 平和教育の理論</b>		
1 オリエンテーション	4月12日	委員
2 平和教育とは何か	4月19日	齊藤
3 戦争体験と現代	4月26日	黒田
4 戦争体験の継承と歴史認識	5月10日	中山
5 平和教育の理念と歴史	5月17日	土屋
6 平和的生存権の確立に向けて	5月24日	和田
7 平和の思想	5月31日	布川
8 討 論	6月 7日	委員
<b>二 平和教育の実践</b>		
9 平和教育の年間指導計画	6月14日	浜本
10 小学校における平和教育	6月21日	(小)
11 中学校における平和教育	6月28日	(中)
12 高等学校における平和教育	7月 5日	(高)
13 平和教育の教材づくり	9月13日	土井
14 討 論	9月20日	委員

## C-⑦-2 神戸大学 教育学部 (1985年度後期)

題 目	月 日	担当教官
<b>一 平和教育の理論</b>		
1 オリエンテーション	10月18日	委員
2 平和教育とは何か	10月25日	土屋
3 食糧問題と平和 (六甲祭?)	11月 1日	秋元
4 沖縄における戦争体験	11月 8日	未本
5 私の戦争体験	11月15日	佐伯
6 戦争と文学	11月22日	西垣
7 戦争と文学	11月29日	山城
8 戦争構造の解明	12月 6日	川端
9 討 論	12月20日	委員
<b>二 平和教育の実践</b>		
10 文学の授業と平和教育	1月10日	杉山
11 小学校における平和教育	1月17日	(小)
12 中学校における平和教育	1月24日	(中)
13 高等学校における平和教育	1月31日	(高)
14 討 論 予備	2月 7日 2月14日	委員

ÉIRE

#### (4) 公開講座(e)

##### ① 概 要

大学（学部）が主催ないし中心となっている市民むけの公開講座は、表Ⅲのとおりである。

##### 〔コメント〕

- \* このうち、法政平和大学（e-1）は1983年以降継続しているが、その他は、単年度であったり、開設年度の不詳なものもある。（e-3）は、全体のなかの一部分に「科学と平和」が含まれている例である。
- \* 学内での総合講座や、シンポジウムが先行して実施され、その後に公開講座へ発展したものが目立つ（e-4, e-6など）。
- \* 講座内容が単行書として出版されている例が多い（e-1, e-4）。

表Ⅲ 公開講座

番号	大学名	講 座 名	対象 (聴講者数)	年 度	世 話 入 等
e-1	法政大	法政平和大学	市民 130~150	'83 ~ 年8~9回	尾形憲（代表）、佐藤昌一郎 など8名
e-2	創価大	平和問題講座	全学学生 100/?	?	平和問題研究所 (記入者、高村忠成) 講師は学外10名招く
e-3	徳島大	人間と科学 (「科学と平和」を含む) 核を考える	市民 40/70	'84.8~10月10回 '85 「地球・生命 '83 のみ	人間」8月~11月、12回
e-4	九大		市民 70名		森 康茂
e-5	長崎大	平和を考える	市民		岩松繁敏
e-6	琉球大	市民平和教室 (I, II, III部)	市民	'85 のみ	武居 洋

## ② カリキュラム表

e-①-1

# 講演と映画による 法政平和大学

(第3期・1985年度開講)

昨年第2期の法政平和大学も、一昨年に続き皆さんのご協力によって盛況を続けました。9回にわたる参加者延べ2,000人、参加範囲は一層拡がり、札幌、函館、盛岡、富山、松本、長野、伊豆西海岸、静岡、愛知、岡山、広島、山口から宮崎に及びました。通学生は前年の倍増となり、通教生も北海道から沖縄まで大きくふえました。地方での草の根も一層の拡がりを見せていました。米ソの核軍縮交渉は再開されたとはいえ、「平和は歩いてこない」、私たちが平和を守る努力をゆるめるならば、“核戦争3分前”的時計の針はさらに進められることになるでしょう。第3世界の飢えも単なる自然現象ではなく、こうした世界の軍拡態勢と表裏一体の問題です。ともに深く学び、考え、行動しましょう。

月日	講演	映画(スライド)予定
5/18	藤田省三「天皇制について」	「にほんのひのまるなだてあかい」
6/15	宇都宮徳馬「限界に来た日米安保」	「子どもたちの遺言」
7/13	中野孝次「第3世界の貧困とゆたかさ」	「無人の野」
8/10	鷺見友好「軍事費急増の実態と国民の安全」	「核戦争後の地球」
9/21	林郁「また再びの棄民—中国残留孤児の問うものー」	「侵略(I)」
10/5	(映画)「子どもたちの昭和史I~III」	
10/19	鈴木佑司「第3世界の軍事化と飢餓」	「侵略(II・III)」
11/16	由井正臣「田中正造の思想」	「艦橋の旗」
12/14	宗 左近「燃える母」	「東京大空襲」「太陽があちた」

場所：法政大学69年館920番教室  
(5、6月は本校833番教室)

時間：毎回午後2:00~5:00

(11月のみ5:30まで。すべて土曜日)

会場整理費：毎回500円(学生200円)

なお託児(ゼロ歳から)は無料

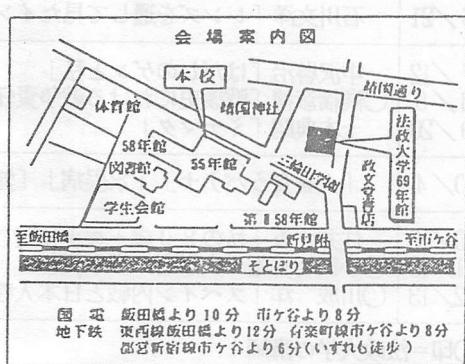
主催：法政平和大学世話人会

(☎03-264-9628)

千代田区富士見2-17-1 法政大学地形研究室内

後援：法政大学教職員組合

(☎03-264-9552)



法政平和大学入学のおすすめ（1985年度）

I. 通学課程	1 一般：年間授業料	7,000円
	2 学生：" "	4,000円
	3 特待生：無料（65歳以上の方、身体の不自由な方および法政大学関係教職員）	

5～12月の講座をすべて受講できるほか、次のような便宜を受けられます。

1. 毎回の講演の速記録パンフを次回のとき交付、または送付。
2. 「法政平和大学通信」（お知らせ、紙上交流など）の交付または送付。
3. 会場で販売している本や資料の割引。
4. 自由大学連合で計画の社会人合宿その他の催しや法政平和大学の連続講座への参加費の割引。
5. 講演速記録パンフを1年分まとめて本にした際の割引。
6. 本大学に関連し、または独立してこの種の公開講座を行うときの講師やフィルムのあっ旋。

II. 通信教育課程 遠隔地居住や勤務などの都合で直接受講できない方々のために、通信教育課程（年間授業料 3,000円）を設けます。この課程では上記1～6の便宜を受けられます。（郵便振替 東京5-70560 法政平和大学）

振替用紙裏に男女別、年齢、職業、電話番号を記入して申し込んで下さい。なお、Iの3による特待生の適用があります。

e-①-2 法政平和大学（第4期・1986年度開講）

月 日	講 演	映 画 （スライド）予 定
5/17	○千葉康則「いじめについて」	「ボクちゃんの戦場」
6/21	石川文洋「レンズを通して見たインドシナ戦争」	
7/12 8/9 9/20	中沢啓治「はだしのゲンと私」 ○高橋彦博「戦後史における戦争責任について」 土本典昭「ミナマタ」	「黒い雨にうたれて」 「子どもたちの昭和史IV—焼け跡に平和をみた」 「海は死なず」
10/4	「人を食うバナナ」「水俣病」「無幸なる海」	
10/18 11/15 12/13	住井すゑ「私の80歳+α平和宣言」 ○小田切秀雄「文学者の戦争責任」 ○川成 洋「スペイン内戦と日本人義勇兵」	「ヒロシマを見た人」「戦場の童」 「きけわだつみのこえ」 「スペインの暑い夏」

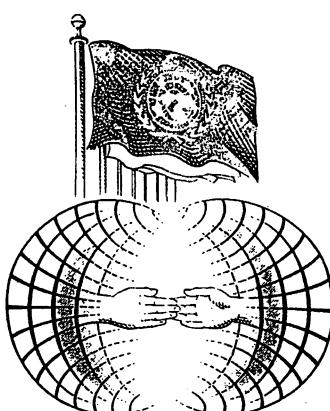
○印=法政大学の講師

9月10日	開講式	深山喜一郎（教養部長）
"	原水爆の原理	森 茂康
17日	核開発と科学者	中山 政敏
24日	核戦略の歴史	高田 和夫
10月1日	核兵器体系の現状	森 茂康
8日	広島・長崎の経験	鎌田 定夫（長崎総合科学大）
15日	放射線と人間	西森 一正（長崎大・医）
22日	今、核戦争がおこったら	岡本 良治（九工大）
29日	核軍縮の努力	高田 和夫
11月5日	核戦略と日本の安保	横田 耕一
12日	核戦略と日本の安保	"
26日	日本人の核意識と運動	永井 秀明（広島大）
"	総括・シンポジウム	他の講師を交えて
	閉講式	深山喜一郎



1945 40 1985

ORGANIZACE SPOJENÝCH NÁRODŮ  
UNITED NATIONS  
ORGANISATION DES NATIONS UNIES  
ОРГАНІЗАЦІЯ ОБЪЕДИНЕННЫХ НАЦИЙ  
ORGANIZACION DE LAS NACIONES UNIDAS  
الامم المتحدة 联合国



1986

MEZINÁRODNÍ ROK MÍRU  
INTERNATIONAL YEAR OF PEACE  
ANNÉE INTERNATIONALE DE LA PAIX  
МЕЖДУНАРОДНЫЙ ГОД МИРА  
AÑO INTERNACIONAL DE LA PAZ  
السنة الدولية للسلام 国際和平年



### 1. 市民平和教室（パートⅠ）

「人類が危ない！ 核の話 第1話、ヒロシマ・ナガサキと現代の核戦争」

1985年8月24日（土） 午後3時～5時半

那覇市教育委員会3階ホール 約40名参加。

プリテスト

映画「予言」上映

講演

「ナガサキの証言」

谷口稜嘆（長崎原爆青年乙女の会）

「ヒバクシャの現在」

武居 洋（琉球大、医学部）

「現代の核戦争の影響」

友寄友造（琉球大、教養部）

質疑・討論

### 2. 市民平和教室（パートⅡ）

「沖縄戦後40年を考える」

1985年9月14日（土） 午後3時～6時

那覇市教育委員会3階ホール 高校生も参加・発言。

映画「戦場の人びと」 （解説）久手堅憲俊（沖縄戦を考える会）

講演

「記録運動と戦跡保存」

石原昌家（沖縄国際大、文学部）

「沖縄戦後40年と県民のこころ」 安仁屋政昭（ “ ” , 教養部）

討論

（戦争体験のない大学生が、「戦争体験記録研究会」を結成し、調査していくなかで、改めて自分の地域の歴史や平和意識に目覚めていったという報告は、政治的無関心とか、平和不感症といわれる若い世代の着実な実践だけに、参加者を勇気づけるものがあった。）

### 3. 市民平和教室（パートⅢ）

「人類が危ない！ 核の話 第2話、核と地球は共存できるか？」

1985年9月28日（土） 午後3時～6時

那覇市教育委員会3階ホール 約30名参加。

ビデオ「核戦争後の地球！」上映

講演

「原発は安全か？」

久間宏三（琉球大、理学部）

「核兵器の体系」

堺英二郎（ “ ” , “ ” )

「核開発の歴史と未来」

矢ヶ崎克馬（ “ ” , “ ” )

討論

e-⑥-2 日本科学者会議沖縄支部『シンポジウム・核と沖縄 報告集』  
(1984年2月)

目 次

「核と沖縄」の発刊によせて ..... 田港朝昭 (琉大教育学部)

1部 核開発と核のおそろしさ

1. 核の原理と破壊力—開発の歴史と科学者— ..... 矢ヶ崎克馬 (琉大物理学部)
2. 核兵器体系 ..... 堀 英二郎 (琉大物理学部)
3. 原子力発電とは? その問題点 ..... 外間 宏三 (琉大物理学部)
4. 原爆被害の実相—保健医学部視点—

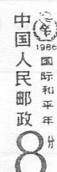
石津 宏・平良一彦・武居 洋・中河志朗・真栄平房子 (琉大医学部)

2部 世界の核戦略と沖縄基地

1. 世界核戦略の現状 ..... 服部 学 (立教大原研)
2. 沖縄基地の現状と役割 ..... 野原 全勝 (沖国大商経学部)
3. もし嘉手納に水爆が落ちたら ..... 友寄 友造 (琉大教養部)
4. 嘉手納に水爆が落ちた! ..... 平良 一彦 (琉大医学部)

3部 核も基地もない沖縄をめざして

1. 詩と戦争・核 ..... 芝 憲子 (詩 人)
2. 戦争体験と平和思想 ..... 鳴 津与志 (作家・県史料編集所)
3. 核と県民の意識 ..... 仲地 博 (琉大短大部)
4. 平和教育の成果と課題 ..... 福地 曜昭 (沖教組副委員長)
5. 世界・日本・沖縄の反核・平和運動 ..... 芳沢 弘明 (弁 譲 士)



(5) 大学別総括表

「大学における平和教育」一覧 (1986年2月～6月実施)							
県名		大学名	a) 講義	b) 演習	c) 総合	e) 公開	記入協力者
1 北海道	1	北大	1育		1		深瀬忠一
	2	北教大(創設)	1理				三宅信一
	3	北星学園大	1倫				八木健三
	4	弘前学院	1政		1短大		米沢紀
	5	東北大	1政				大西仁
	6	福島大	1政	(2)倫	1		羽田貴史 堀孝彦
	7	筑波大			1		進藤栄一
	8	茨城大			1		伊集院立
	9	宇都宮大	1法		1		宮本栄三
	10	埼玉大			1		林量継
8 東京	11	東京大	1院(政)				関寛治
	12	一橋大	1技	2社			浜谷正晴
	13	東工大		1技			飯田賢一
	14	都立大		1育			山住正巳
	15	早稲田	4(1)政経育			1	西川潤 佐貫、尾形、佐藤、栗野
	16	法政大					吉沢四郎
	17	中央大			1		藤原秀雄
	18	立正大					榎原道夫
	19	東海大	1理				伊藤武彦
	20	和光大	1育				高村忠成
	21	創価大				1	片平冽彦
	22	明治学院大	1医				
9 神奈川 10 新潟 11 愛知	23	関東学院大			1		小南祐一郎
	24	新潟大	3法政		1		.....
	25	名古屋大			1		伊藤忠士、近藤哲生、
	26	愛知県立大					松井芳郎、佐々木雄太
	27	中京大					宍戸健夫
	28	日本福祉大	1育				吉川仁、杉江栄一
							水野曉子
12 京都 13 大阪 14 兵庫	29	立命館大	3政医	1政	1		藤岡惇、田中宏道、安斎育郎
	30	大阪大					馬場伸也、高木昌彦
	31	神戸大					土屋基規、浜本純逸
	32	甲南大			1育		藤田晃
15 広島 16 香川 17 徳島 18 福岡 19 長崎 20 府児島 21 沖縄	33	広島大	2(1)平政		1		山田浩、森祐二
	34	四国学院大	2平和	1平和			岡本三夫
	35	(徳島大)					.....
	36	鳴戸教育大	1院				永井滋郎
	37	四国女子大	1育				.....
	38	九州大	1理				森茂康
	39	九州工大	1理				岡本良治
	40	長崎大	1経	1経	1	(1)	岩松繁敏
	41	鹿児島大	2政倫		1		功刀俊洋、種村完司
	42	琉球大			1		武居洋
	43	沖縄大	1理		1		宇井純
21 県	43 (1) 大学		34 (2) 例	12 (2) 例	17 (0) 大学	6 (2) 大学	57 名
					69 (6) 例		

(..) 内の数字は、1985年度に実施されていないもの。

## II-2 テキストおよび参考文献など

### (1) 個人担当の講義および演習

#### —テキスト—

##### 1 平和学

- a-1 山田浩編「新訂・平和学講義」  
勁草書房

##### 2 法律学

- a-4 上野裕久編「現代日本の憲法」  
法律文化社
- a-5 田畠茂二郎「国際法講義」上（新版）  
有信堂
- a-6 " " 下（新版）

##### 3 政治学

- a-7 坂本義和編「暴力と平和」朝日選書
- a-8 進藤栄一編「平和戦略の構図」  
日本評論社
- a-9 「平和学」早大出版部  
「国際政治学を学ぶ」有斐閣
- a-12 馬場伸也「アイデンティティの国際政治学」東京大学出版会  
同「地球文化のゆくえ」同  
西川潤「南北問題」NHKブック
- a-14 藤原彰ほか「天皇の昭和史」新日本出版社  
小林弘二「満洲移民の村」筑摩書房

##### 4 社会学

- b-4 1979～86年の各テキスト  
林京子「ギャマン・ビードロ」  
講談社  
一橋論叢「原爆・戦争体験と想像力」  
石田忠退官記念号

中山良彦「人間でなくなる日」

文芸春秋

石田忠「原爆と人間」機関紙連合  
通信社

日高六郎「戦後思想を考える」岩波  
新書

家永三郎「戦争責任」岩波書店

##### 5 経済学

- b-6 Francois Perroux, A New Concept  
of Development, UNESCO  
Ignacy Sachs, The Discovery of  
the Third World

##### 6 哲学・倫理学

- a-18 K・バルト「キリスト教倫理」(Ⅲ  
生への畏敬)
- b-8 サマヴィル「平和のための革命」  
岩波書店(1978年度使用)

日高六郎「戦後思想を考える」  
岩波新書

湯川秀樹編「平和の思想」雄渾社  
(1982年度使用)

##### 7 教育

- b-11 Hellena Kekkonen, Window onto  
the Future  
ユニセフ「子供白書」('85年版)
- a-24 永井滋郎「国際理解教育に関する研  
究」第一学習社

##### 8 自然科学

- a-26 宇佐見正一郎「自然科学への招待」  
開成社
- a-28 日本科学者会議「SDI」
- a-31 片平利彦編「現代の保健——いのち  
・健康・平和」篠原出版
- a-32  
a-33 「国民衛生の動向」

- NGOシンポ作業文書Ⅰ、Ⅱ  
大阪市原爆被害者の会出版物  
高木昌彦『大阪に根ざした非核平和  
ゼミ・テキスト』
- ①被爆国民の立場と科学的方法
  - ②核軍拡競争のルーツを探る—製造・使用の論理、その非人道性—
  - ③被爆の実相とその後遺—非核平和の論理の創造—
  - ④非核平和の理念と展望—被爆者の人権回復を基調に—
- a-34 宇井純『公害原論』 亜紀書房
- (2) 個人担当の講義および演習  
——参考文献、視聴覚資料名——
- 1 平和学
- a-1 「地球の運命」  
「平和学—理論と課題—」  
(ビデオ) ヒロシマに関するテレビ番組
- 岡本三夫「平和学講座—四国学院大学の場合」『平和研究』10号
- 2 法律学
- a-4 我妻・恒藤ほか著『民主主義の法律原理』 有斐閣  
田畠忍『世界平和への大道』 法律文化社  
カント『永遠平和のために』 岩波文庫  
有斐閣編『第九条』  
小林直樹『第九条』 岩波新書  
(8ミリ映画) 1945年8月ヒロシマ・ナガサキ  
(NHK-TVビデオ) 地球炎上、凍る地球
- a-8 岩波書店編『平和問題と日本の生き方』 岩波書店
- a-11 豊田利幸『新核戦略批判』  
坂本義和『軍縮の政治学』 岩波新書  
シューマン『国際政治』
- a-12 日本平和学会編『平和研究』
- a-14 藤原彰『日中全面戦争』 小学館  
別技篤彦『戦争の教え方』 新潮社
- 4 社会学
- a-15 高橋堯『現代の核兵器』 岩波新書
- b-4 西島有厚『原爆は何故投下されたか』 青木書店  
フランクル『夜と霧』 みすず書房  
井川一久『このインドシナ』 連合出版  
『沖縄県史・資料編』  
ジョナサン・シェル『地球の運命』 朝日出版社  
(映画) 「ファニア歌いなさい」  
(原爆を主題とする音楽)
- 5 経済学
- b-6 (タイ映画) 「ウボシからの手紙」  
(富山TV) 「ザ・サバイバル」  
(NHK-TV横浜支局) 「いま逗子市役所で」
- 6 哲学・倫理学
- a-18 松木治三郎『人間』 日本基督教団出版局  
坂本義和『軍縮の政治学』 岩波新書
- a-19 エラスムス『平和の訴え』 岩波文庫  
ルソー『永遠平和論批判』  
カント『永遠平和のために』 岩波文庫  
レーニン『社会主义と戦争』

家永三郎『太平洋戦争』 岩波書店  
家永三郎『戦争責任』 岩波書店  
丸山真男『現代政治の思想と行動』  
未来社  
(ビデオ) NHK「核戦争後の地球」

## 7 教育学

- a-20 満洲七虎力親睦会編『わが子よゆるして』 日中出版  
フランクル『夜と霧』 みすず書房  
森村誠一『悪魔の飽食』 カッパノベルズ  
本多勝一『中国の旅』 朝日新聞社  
池宮城秀意『戦争と沖縄』 岩波ジュニア新書  
菊池ほか編『あの人は帰ってこなかった』 岩波新書  
国連事務総長報告『核兵器の包括的研究』 連合出版  
上田耕一郎『第三の危機』 大月書店  
林茂夫ほか『自衛隊』 東研出版  
小林直樹『憲法第九条』 岩波新書  
平野義太郎『平和の思想』 白石書店  
大江志乃夫『徴兵制』 岩波新書  
稻垣真美『兵役を拒否した日本人』 岩波新書  
山科三郎『人間の尊さとはなにか』 青木書店  
竹内常一『若い教師への手紙』 高校生文化研究会  
森田俊男『平和・軍縮のための教育』 新日本出版社  
a-21 法政平和大学『平和は歩いてこない』 効草書房 1984  
同 「草の根から平和を」 効草書房, 1985  
(映画) 「おこりじぞう」

- (スライド) 「母は枯葉剤を浴びた」  
b-11 日本戦没学生記念会編『きけ わだつみのこえ』 岩波文庫  
『中国の旅』  
国連資料  
自然科学者の関係著書  
a-22 松浦総三編『逃げられなかった父と母』 大月書店  
a-23 藤井敏彦著『幼児期の平和教育』 ささら書房  
広島平和教育研究所編『ひろしま—今日の核時代を生きる』  
同『ひろしま—原爆を考える—』  
同『ひろしま—これはわたしたちのさけびです—』  
同『Let's Cry for Peace』  
以上「広島平和教育研究所」発行  
同『平和教育実践事典』 労働旬報社  
高校生のための平和読本『明日に生きる』 広島県高教組  
莊司雅子『親と子のための平和教育』  
広島平和文化センター  
長田新編『原爆の子』 岩波書店  
広島平和教育研究所ほか編『ヒロシマで教える—核時代の平和教育』  
労働教育センター

## 8 自然科学

- a-27 飯田賢一『技術思想の先駆者たち』 東洋経済  
同『人間と技術のふれ合い』 そして  
同『風土と技術と文化』 そして  
a-28 自作スライド, 広島原爆資料館作成  
a-31 安斎育郎監修スライド『いのちが・地球が危ない』  
(岩波映画) 「ヒロシマ・ナガサキ

- 一核戦争のもたらすものー」  
 (自作ビデオ) T V 番組より作成  
 a-32 (スライド) 被爆の記録を贈る会作  
 成のもの (64枚のうち)  
 a-34 (フィルム) 公害原論

(3) 総合講座のテキストまたは参考文献など  
 (前掲のカリキュラム表と対照して下さい。)

C-1 北大 (1980年度の場合)

- I 坂本義和「平和—その認識と現実ー」  
 毎日新聞社  
 日本平和学会編『平和研究』 各号  
 III 長田新編『原爆の子』 岩波書店  
 広島平和文化図書刊行会編『ヒロシマの証言』 日本評論社  
 石田明『被爆教師』 一ツ橋書房  
 広島長崎証言の会『広島・長崎30年の証言』 未来社  
 早乙女勝元『東京大空襲』 岩波新書  
 森田・横川『平和教育』 明治図書  
 国民教育研究所『平和教育の理論と実践』 草土文化  
 広島平和教育研究所『ヒロシマで教える』 労働教育センター  
 (定期刊行物)『平和教育』 明治図書 1~10号  
 日本平和学会編『平和と人権』 早大出版部  
 山田・閔・永井・石田・庄野編『ヒロシマからの報告』 労働教育センター  
 藤井敏彦編『幼児期の平和教育』 ささら書房  
 IV 久野収『平和の論理と戦争の論理』  
 岩波書店  
 石田雄『平和の政治学』 岩波新書  
 宮田光雄『非武装国民抵抗の思想』  
 岩波新書  
 星野安三郎編『法と平和』 「法学文

- 献選集』第10巻 学陽書房  
 福島新吾『非武装の追求』 サイマル書房  
 "『日本の防衛』 東大出版会  
 太田一男『権力非武装の政治学』 法律文化社

- V 内村鑑三の諸著作  
 宮田光雄『平和の思想史的研究』 創文社  
 角田三郎『靖国と鎮魂』 第三書房  
 西村秀夫『矢内原忠雄』 日本基督教団出版局  
 VI 石田雄『平和の政治学』  
 平野義太郎『平和の思想—その歴史的系譜』 平和新書  
 ストックホルム国際平和研究所編『核時代の軍備と軍縮』 時事通信社  
 川田侃『国際関係の政治経済学』 N HK  
 朝日新聞社編『国際シンポジウム・世界の中の日本の役割』  
 全国憲法研究会編『憲法と平和主義』  
 「法律時報」臨時増刊 1975年  
 深瀬忠一『戦争の放棄』 三省堂  
 "『長沼裁判における憲法の軍縮平和主義』 日本評論社  
 "『平和憲法の新しい総合的省察』『平和と人権』所収  
 防衛庁編『防衛白書』 昭和55年版  
 猪木正道先生退官記念『日本の安全・世界の平和』 原書房  
 清水幾太郎『核の選択』 「諸君」  
 '80.7

C-4 茨城大

- 吉田昭久『人間の攻撃性』 (参考図書)  
 ローレンツ『攻撃—惡の自然史ー』  
 みすず書房

- Dolf Zillman, Hostility and Aggression, LEA
- Richard Lazarus, The Riddle of Man—An Introduction to Psychology—, Prentice-Hall
- 福島章「現代人の攻撃性」『現代のエスプリ』No.89. 至文堂
- アンナ・フロイト『自我と防衛』誠信書房
- 原俊夫ほか編『攻撃性—精神医学の立場から一』岩崎美術出版社
- ミチャーリヒ『攻撃する人間』法政大出版局
- フランクル『夜と霧』みすず書房
- 大江志乃夫  
大江志乃夫「第三次安保体制下の軍事化」歴史学研究会編『講座・日本歴史』13 東大出版会
- 村中知子「情報化社会と民主主義」富田・岡沢編『情報とデモクラシー』学陽書房
- 堀部政男「アクセス権」東大出版
- 石村善治編『情報公開』法律文化社
- 朝日新聞取材班「日本での情報公開」朝日新聞社
- 今橋・高寄編著「自治体の情報公開」学陽書房
- J. A. バロン「アクセス権」日本評論社
- 清水英夫「情報公開」日本評論社  
「情報公開と知る権利」三省堂
- 東大公開講座13「情報」東大出版
- 山田壹生「組織変革と情報システム」文真堂
- 箕輪成男「情報としての出版」弓立社
- リチャード・ディーコン「日本の情 報機関』時事通信社
- 豊田利幸「新核戦略批判」岩波新書
- 筒井若水「自衛権」有斐閣選書
- 「兵器生産の現場」朝日新聞社
- 夏村繁雄「日本の防衛」中央文芸社
- 林茂夫・松尾高志「自衛隊」東研出版
- 「社会新報」ヨーロッパ反核取材班  
『生き残る道』労働教育センター
- 伊藤成彦「反核メッセージ」連合出版
- 田原総一郎「原子力戦争」筑摩書房
- 吉本隆明「「反核」異論」深夜叢書社
- 石川竜「核さがしの旅」朝日新聞  
ガストン・ブートゥールほか『戦争の社会学』中央大学出版部
- カイヨワ『戦争論』法政大出版局
- 日本平和学会「平和学」早大出版部
- 岩松繁敏「反核と戦争責任」三一書房

#### C-5 中央大（「戦争と平和の論理」）

- \* 戦争と平和の政治力学
- ブートゥール『戦争の社会学』中大出版部
- \* 現代の戦争—核の脅威—
- S I P R I 編『核時代の軍備と軍縮』
- \* 戦争と市民生活
- 小林直樹「国家緊急権」学陽書房
- \* 戦争と知識人
- 野村修『スヴェンボルの対話』平

凡社

脇圭平『知識人と政治』 岩波新書  
池田浩士『ファシズムと文学』 白  
水社

### C-8 名古屋大学

#### 課題図書 A グループ

1. 家永三郎「太平洋戦争」  
岩波日本歴史叢書
2. 遠山茂樹他「昭和史」 岩  
波新書
3. 大江志乃夫「靖国神社」  
岩波新書
4. 大江健三郎「沖縄ノート」  
岩波新書
5. 中野好夫他「沖縄70年前  
後」 岩波新書
6. 瀬長亀次郎「沖縄からの報  
告」 岩波新書
7. 日高六郎「戦後思想を考え  
る」 岩波新書
8. 土方和雄「『日本文化論』  
と天皇制イデオロギー」 新  
日本出版社

#### 課題図書 B グループ

1. 「世界」編集部 「軍事化  
される日本」 岩波ブックレ  
ットNo.30
2. 坂井昭夫「軍拡経済の構図」  
有斐閣
3. 朝日新聞社名古屋本社社会  
部「兵器生産の現場」 朝日  
新聞社
4. 高橋堯「現代の核兵器」  
岩波新書
5. 豊田利幸「新・核戦略批判」  
岩波新書
6. NHK取材班「シーレーン」  
日本放送出版協会

7. 飯島宗一他「核廃絶は可能  
か」 岩波新書
8. K. コーツ編「核廃絶の力  
学」 勉草書房
9. 坂本義和「軍縮の政治学」  
岩波新書

☆レポートは図書1点につき原稿用  
紙(400字)10枚を目途にして趣旨  
・各自の考え、疑問点、感想などを  
まとめること。  
(映画) 侵略

### C-9 中京大

#### 核戦争の危機と人類

杉江栄一「軍縮—平和への選択—」  
法律文化社  
(映画) 「予言」、「核戦争後の地  
球」

#### 人間と攻撃行動

ローレンツ「攻撃」 みすず書房  
アイブル=アイベスフェルト「戦争  
と平和—その行動学的研究—」  
思索社

ウィルソン「人間の本性について」  
思索社

ドーキンス「生物=生存機械論—利  
己主義と利他主義の生物学」 紀  
伊国屋書店

#### 憲法と恒久平和主義

「註解日本国憲法」法学協会1953と,  
「注釈日本国憲法」 青林書院新社  
1984との対比—“核の時代”的認識  
の法解釈への反映として。

### C-11 立命館大

渡辺久丸「安保とその周辺」 昭和  
堂  
渡辺洋三・岡倉古志郎編「日米安保  
条約」 労働旬報社

三修社編「最新軍事用語辞典」  
レーニン「帝国主義論」 国民文庫  
ほか

C-12 甲南大

アメリカの核実験と被爆訴訟  
広瀬隆「ジョン・ウェインはなぜ死んだか」 文芸春秋  
H. ローゼンバーグ『アトミック・ソルジャー』 社会思想社  
H. ワッサーマン『被爆国アメリカ』 早川書房  
原爆と文学  
原民喜「夏の花」三部作『全集』 青土社  
大田洋子「屍の街」「大田洋子集」 全四巻、三一書房  
佐多稻子「樹影」 講談社  
竹西寛子「儀式」 筑摩書房  
井上光晴「地の群れ」 河出書房新社  
堀田善衛「審判」 岩波、集英社  
いいだ・もも「アメリカの英雄」 河出選書  
小田実「HIROSHIMA」 講談社  
林京子「無きが如き」 講談社  
大江健三郎「ヒロシマ・ノート」 岩波新書  
金井利博「核権力」 三省堂

C-13 広島大学 (テキスト)

山田浩編「新訂・平和学講義」 効草書房

C-14 九州大

九州大学公開講座11「核を考える」  
九州大学出版会

C-15 長崎大学

① ジョナサン・シェル「地球の運命」  
朝日新聞社

C-16 琉球大学 (テキスト)

「シンポジウム核と沖縄 報告集」  
日本科学者会議沖縄支部 1984.2  
参考書  
渡辺千恵子「長崎に生きる」 新日本新書  
伊東壯「1945年8月6日」 岩波ジュニア新書  
杉江栄一「軍縮」 新日本新書  
日本科学者会議「核—知る・考える・調べる」 合同出版  
服部学「核兵器と核戦争」 大月書店  
ロートプラット「核戦争と放射線」 東大出版会  
スウェーデン王立アカデミー「1985年6月 世界核戦争が起こったら」 岩波書店  
別冊サイエンス 別冊62「核戦争と医学」 日経サイエンス  
「法学セミナー」 非核三原則法案 特集 1979年6月号  
「法学セミナー」 市民の平和白書 1984年増刊号  
小林直樹「憲法第九条」 岩波新書  
飯島宗一ほか「核廃絶は可能か」 岩波新書  
有斐閣編「憲法第九条」  
沖縄県歴史教育者協議会「もう一つの沖縄戦」 歴史と実践 「沖縄戦と教科書検定」特集  
南方同胞援護会「沖縄問題基本資料集」  
沖縄県民間教育研究団体協議会「おきなわの教育実践」

- 沖縄県「沖縄県史 沖縄戦証言」  
 (16ミリフィルム)  
 「人間を返せ」「戦場の童」
- (4) 「大学における平和教育」に  
 かんする研究・実践報告など(順不同)
- 小南祐一郎「平和研究と国際情勢」  
 " 「日本における平和研究の課題」  
 (『関東学院大学経済学部一般教育論  
 集』第4号、5号)
- 多賀秀敏「資料・研究ノート・平和論を開  
 講するために」, 新潟大学法学会『法政  
 理論』第15巻第3号, 1983. 1月
- " 「資料・研究ノート・平和論のため  
 に」『同上誌』第16巻第1号, 1983,  
 10月
- " Beyond Structure : Blind to  
 Pain of the Suffering, Deaf to  
 Crisis of the Oppressed, Peace  
Research in Japan 1951-84 (Dec.  
 1983) pp.41-45
- 岡本三夫「平和学」(論文集) 1985,  
 四国学院大学平和学教室(頒布元)
- 岡本三夫「平和学への接近」(論文集)  
 1986, 四国学院大平和学教室(頒布元)
- 日本教育学会『教育学研究』 50巻1号,  
 1983年3月
- 外山英昭(山口大)「青年期平和教育の課  
 題と方法—主体的平和認識の形成をめぐ  
 って—」
- 佐貫浩(法政大)「平和教育の条件と方法  
 —個における「平和」概念の形成過程  
 について—」
- 藤田秀雄(立正大)「ユネスコ・軍縮教育  
 論とわが国の課題」
- 日本教育学会『教育学研究』 52巻1号,  
 1985年3月
- 太田卓(法政大)「法政平和大学講座の經  
 驗から」
- 林量淑(埼玉大)「総合講義“人権と平  
 和”の開講から」
- 杉山明男(神戸大)「“平和教育”講義  
 2年目の経験から」
- 日本科学者会議『日本の科学者』 1983年  
 8月
- 雨宮昭一「反核・平和・学問—茨城大学、  
 学生の要求をもとに—」
- 小南祐一郎「関東学院大学—総合研究をめ  
 ざして—」
- 柴田敏之「名古屋大学—自主講座からカリ  
 キュラム編入へ—」
- 桜井秀威「長崎平和文化研究所について」
- 吉川仁・杉江修治「「平和論」に関する資  
 料」『中京大学教養論叢』第26巻第1号,  
 中京大学学術研究会 1985年4月  
 (中京大学の総合科目「平和論」に関する  
 資料で, 1. どのように取り組まれて  
 きたか, 2. 研究・教育上もつ意義, 3.  
 課題, 4. 講義要綱, 5. アンケートの  
 結果を含む詳細な報告となっている。  
 p.p. 83~119)
- 村瀬裕也「一般教育演習科目における表現と  
 討議—平和問題をめぐって—」, 「一般  
 教育学会誌」5巻2号, 1983, 12月
- 堀孝彦「ヒロシマが現代に問いかけるもの  
 —福島大学における平和教育教材—」,  
 「福島大学教育学部論集」(社会科学部  
 門)第37集, 1985, 2月。
- " " 「ヒロシマが現代に問いかけるもの  
 (その二) —福島大学「現代と平和」講  
 義要旨—」, 「同上誌」第38集, 1985,  
 11月
- 外山英昭「地域学習と調べる社会科」 民衆  
 社 1984

深瀬忠一・大友浩編著『北国の理想』 新教  
出版社 1982

(5) 見学・訪問・調査など

日本科学者会議島根大学分会「私と太平洋戦争」 1985年2月  
福島大学教職員「戦争・戦後体験」記録刊行委員会「十五年戦争と私たち」 1985年12月8日 78名  
大阪府立大学教職員の戦争体験を記録する会  
『大阪府立大学教員の綴る私の戦争体験』 1985年12月20日 60余篇

Helena Rytovuori ; Disarmament education in the universities : the case of Finland, Magnus Haavelsrud (ed); Approaching Disarmament Education. 1981, Westbury House 所収

a-1 各自に夏の間にセミナー、キャンプをすすめている。

b-6 伊豆東農協農産加工事業見学 ('86.4月)

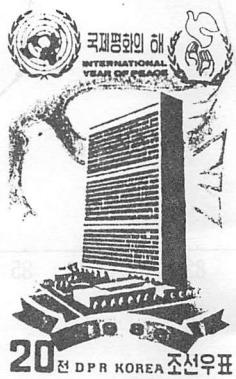
沖縄県国頭郡本部町で沖縄大学と合同セミナー「地域発展」ほか。戦跡、平和資料館、伊江島見学。

a-18 車力村ミサイル基地を外から見学。ヒロシマとナガサキ

b-11 社会教育研究全国集会への参加。一部の学生は平和教育分科会に参加。

a-34 下水処理場見学、石けん作り実習

c-16 基地・戦跡巡検（授業外の企画として計画）

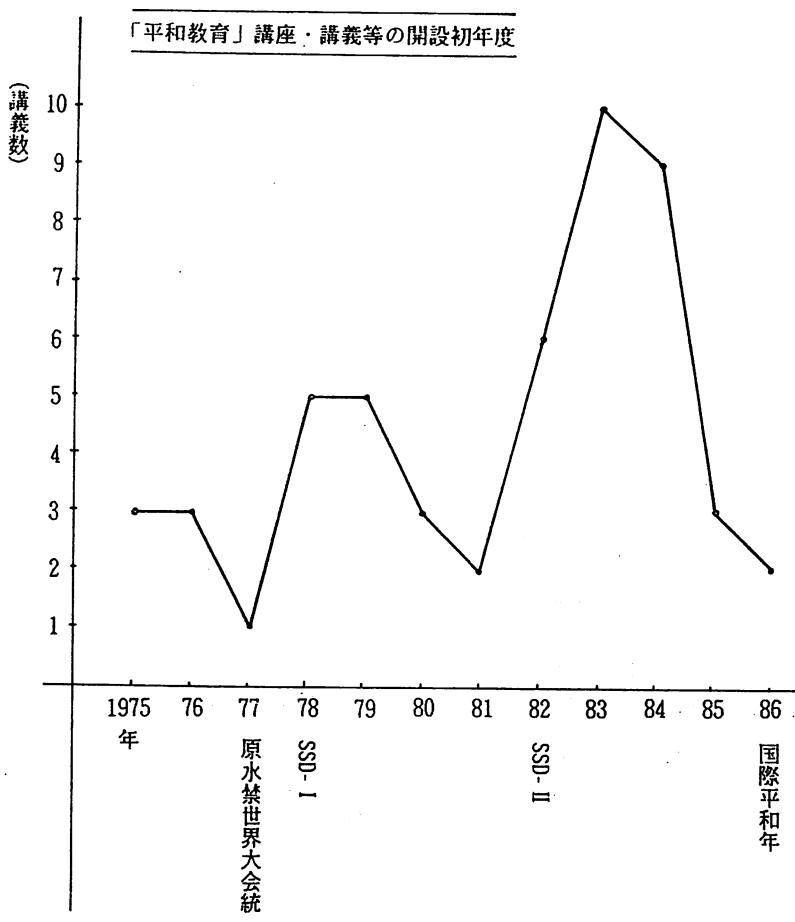


## II-3 開設初年度

事例の形態を問わず、それらの開設初年度別に合計してグラフを作ると、図1が得られる。

### 〔コメント〕

- \* 単純合計すると、このように二つの山をもったグラフとなる。開設初年度の不詳なものが約10例あり、もっと事例が増えたとき、依然として二つの山になるのか、一つの山に近づくのかはわからないが、第2回の国連軍縮特別総会の1982年直後がピークをなしている。
- \* 逆にいえば、それ以降の新たな開設は少なく、下りカーブとなっている。
- \* しかし、開設後は殆ど継続されているし、87年度開設予定の例も報告されている。



---

## II-4 教育内容・方法

---

問⑭：教育の内容・方法について、特色や、とくに重視している点をご記入下さい。――

- 1 北大 毎回小レポート。全講義後に総合討議。最後に自主的学習・思索成果をレポートにまとめて提出させ、ある選定テーマを中心に突込んで考えることを求める。かつ平和についての総合的・自立的考察と意見を求める。
- 2 北教 新聞・雑誌から得た資料をもとに「ノート」を作らせるに力を入れた。
- 3 北星 科学者の社会的責任について、とくに原爆製作に関与した科学者の問題から、ラッセル・AINシュタイン宣言の発表、この現代史的意義を詳述する。
- 4 弘前学院 キリスト教の学校であり、私自身キリスト者なのでキリスト教の立場で平和を語る。倫理学特講ではバートの『キリスト教倫理』ⅠⅡⅢを使い、Ⅲに「生の畏敬」として戦争と平和を扱っている。
- 6 福島 視聴覚機材の利用、多領域の講師陣（学外を含む）による多角的接近。事実認識を深めるとともに、主体（人間）の問題を提起。進行形式に工夫、学生の擬似参加も。
- 9 宇都 平和こそ人権の基礎であることを強調。憲法の人権論のなかに平和論を組みこんでいる。
- 10 埼玉 毎回最後に感想文を書かせている。最終日にパネルディスカッションを行なっている。
- 12 一橋 前半はテキストの輪読、後半は各自の自由報告。どのようなものであれ、戦争体験から出発することを重視し、戦争をとらえる<人間の視点>の形成をめざしてきた。
- 13 東工 人間にとってのはんとうの技術は、長期的視野、原点に立ちかえって考えれば、決して戦争によって進むものではなく、平和な国際交流の中ではじめて進むものであること。
- 15 早大 開発－低開発問題を実地調査、生活体験に即して理解させ、平和と不可分のものであることの認識にすすむ。沖縄で沖縄大学と合同セミナー。
- 18 立正 学生すべてが何らかの社会教育活動に参加することになっており、その中で平和学習に参加する者あり。
- 25 名大 （国際政治史）正確な現状認識に立った問題意識を育てる。現状認識に基づく社会科学の“規範性”（目的的性格）を強調し、安易な現状肯定に陥ることを批判する態度を育てる。
- 30 大阪 （政）特にNGOによる「人類益」（軍縮・平和、人権擁護、環境保全、飢餓・貧困の克服）の追求について、及び南北問題。
- 30 大阪 （医）被爆者が教壇に立つことにより、原点の理解を深めさせている。
- 31 神戸 小・中・高校の教師で平和教育の実践をしている者の参加をえている。

- 32 甲南 経済学の視点を欠いている、今後改善すべき点。
- 33 広島 (総合) 年度の最初の時間に責任者の講義ということで、被爆者2名の体験を語ってもらうこととしている。
- 34 四国学院 講義とグループによる自主学習と半々。
- 37 四国女大 良い教材、つまり質の高いもので、美しい心を育て、人間を豊かにし、おのずと戦争など否定する人間に育つ、そのような教材をあたえねばならないと考えている。
- 40 長崎 (総合) 「平和」について真面目な問題意識をもち、自発的に思索する姿勢を育てる。被爆地長崎の特殊性を認識しつつ、日本の戦争責任を理解すること。
- 40 長崎 (経) 天皇制、核問題、戦争責任、戦争体験のとらえかたについて基本的なことを講義。
- 41 鹿児 (政) ①南京事件、七三一部隊、朝鮮人強制連行など十五年戦争における日本軍の加害史に関する書籍の読書感想文を提出させている。②戦争政策にかかわる日本の外交文書や天皇の発言について資料を配布し読み合わせている。
- 41 鹿児 (倫) 講義の後半部で、小・中学校の平和教育教材を朗読し、学生に聴かせた。冬休みに、"戦争と平和に関する児童文学"をよませ、レポートを提出させた。
- 42 琉球 平和学習・思索・実践への意識変革を促すため、最初に引き金として、あるいは種々の問題意識をもたせるため、16ミリフィルムを用い、カリキュラムは、核の原理・歴史から種々の問題点の指摘と解明、核軍縮・核廃絶の不可欠、緊急性にいたるまで順序を工夫し、最後に再び最初と同じ16ミリフィルム"人間を返せ"を上映、学生・教師と総合討論で結んだ。
- 43 沖縄 自然科学的要素を入れること。

---

## II-5 評価の方法

---

問(5)：試験出題・評価の方法についてご記入下さい。――

- 1 北大 小レポートの提出状況を参考にしつつ、最終レポートに優良可不可で採点。政治性やイデオロギー性は一切混入しない。勉学・思索の程度と論旨の通し方で客観的に評価する。
- 2 北教 レポート3回。
- 3 北星 R・E宣言の英文の和訳なども課し、学生の平和問題への意向をはかる。「国家機密法案」についても試験に出して意見を求めた。
- 5 東北 通常の学年度末試験。
- 6 福島 レポート2回（前・後期各1回）と学年末試験。（なお毎回感想文で出欠と、意識変化をみる）。
- 7 筑波 レポート。

- 9 宇都 3講義に1回位の割合で小レポートを書かせ、徐々に認識を深めしめ、学期末・学年末のテストと併用し総合評価。
- 10 埼玉 出席とレポート。講義中の1つの柱をとり上げさせ、そこから「人類と平和」という大きいテーマに迫ることを求めている。
- 12 一橋 演習は毎回出席が義務。レポートと発言で評価。成績は合否のみ。
- 13 東工 自主的に考え、自分の考えをのべることが大切で、人や本の模倣をしないこと。
- 15 早大 論文、演習参加。
- 17 中央 担当者により異なる。①各人が担当の最後に試験する（年に4～5回）。②前期の2人は前期試験に、後期の2人は後期試験におこない合算する。③最終の試験に4人も出題し、2問選択して書かせる。④総合的問題を出題し、学年末試験に回答させる。⑤レポートによる。
- 18 立正 実践にもとづくゼミ論文提出。他に英文訳、討論、合宿など8割おこなえば、すべてA。A以外はつけない。
- 22 明治学院 通常の筆記試験。
- 25 名大 (総合) 3～4名が答案をよみ、A～Dの評価をし、総合して評価を出す。
- 25 名大 (国際政治史) 「核抑止論を批判的に論ぜよ」「国際政治はPowerをめぐる競争的闘争であるとする国際政治観を批判的に検討せよ」。
- 27 中京 論文形式や、5人各1題出題など。
- 29 立命 3問中1間に解答、年度末試験により評価。
- 30 大阪 (政) 試験、レポート提出、討論。
- 30 大阪 (医) 200字の感想文を書かせ、出席点をつける。
- 31 神戸 毎回の感想文と、期末のレポート提出。三分の一以上の欠席者はレポート提出資格なし。担当教師が分担して評価。
- 33 広島 (総合) レポート方式、最終時間に必ずアンケート。来年度から各講師ごとにレポートを提出させる予定。
- 34 四国 試験はしない、グループ学習でリポートを出させ、それを評価の基準としている。
- 36 鳴門 論文テスト（国際理解教育の現況について批判的に考察せよ）。
- 37 四女 ①記録ノート（レポート）、②実技（うた）。
- 38 九大 (総合) 各教官が1問ずつ出題、学生は3問選んで解答。
- 40 長崎 (総合) やむをえずレポート、試験、出欠により評価点をつけねばならない。試験出題は基本的知識の習得を評価するのを目的とし、レポートは戦争体験の書き書きを内容とする。
- 41 鹿児 (倫) 3～4回ほど行った出席点と、冬休みレポート、テストの三者を総合して評価している。
- 42 琉球 プレテスト、ポストテスト、同じものを出題。核の知識・意識の変化をみる。それとともに各担当者が独自の論述テストをそのつど出題、全体、成績を合計した。
- 43 沖縄 はじめに出題、自分の体験、講義批判。

## II-6 学生の反応

問16：聴講・参加者の反応（意識変化をふくめ）について、お感じになったことをご記入下さい。――

- 1 北大 反応は真面目、熱心で、毎回の小レポートの負担に耐え、一般的によく勉強し、考えているといってよい。
- 2 北教 「核戦争」についての具体的イメージをもつことができた学生の間では、（自らの学習によって）平和運動の意義がかなりな程度に理解できたように思う。
- 3 北星 多くの学生がかなり熱心に聴講している。ある学生は、手紙で「こんなすばらしい講義は始めてだ。これからもこのような講義をつづけて下さい」と感想を書いてきた。また聴講生から、このような平和の講義をしてほしいとのまれ、学生のサークル、自治会などで講演したこともある。
- 4 弘学 半数が関心を示した（短大の総合科目）。
- 7 筑波 平和問題への関心が高くなること、問題意識が生まれることがよくわかる。「軍縮を考える会」という学生サークルができました（小生が顧問）。
- 8 茨城 学生の働きかけで誕生した。多面性の功罪。「まとまりがない」など学生の目は甘くないが、受講生は増大。自分を考える機会として選択している学生もいるくらい（「茨大教職組新聞」より編集）。
- 9 宇都 とくに第9条関係の判例をあげて講義したものには興味をもったようだ。
- 10 埼玉 十分準備して内容的にも深まっており、教育方法的にも工夫された講義には、圧倒的多数の受講生が「目を開かれる思いがした」という趣旨の感想を書いている。
- 12 一橋 入ゼミの動機と、1年間の総括レポートを出させている（前期演習）。情報による知識に偏る現状において、体験による認識はきわめて大きな意義をもつ（後期演習）。
- 13 東工 戦争や軍事技術が技術の進歩をもたらすと思いこんでいた学生も、講義が終るまでには、そうでないことをわかってくれて、あらたに科学者・技術者としての自覚、社会的責任を感じてくれている。
- 15 早大 近年、卒業者の間で地域社会で働くことを選ぶ者がふえて喜んでいる。
- 16 法政 （公開）毎回のアンケートを通信としてまとめ配布。毎回熱烈な反応が多い。
- 17 中央 一年生が多く、受験勉強とは異なる刺激が十分にあったと思う。強い軍事力が現在の国際環境で必要だという、政府のPRをうけいれている学生もあり、平和教育の重要性を痛感している。
- 18 立正 半数は受け身であるが、積極的に学外で平和問題学習や運動に参加するものあり。
- 19 東海 T V等でおよそ感じていたことが、具体的に内容を説明することにより、学生

- の反応はよい。
- 22 明学 「ヒロシマ・ナガサキ」のビデオを「見たくない」という少数と、もっと見たいという意見。何をなすべきか「無力感を訴えるもの」と、学習・伝達可能とする者など多様な反応。「健康と平和がこれほど関係の深いものだとは思っていませんでした。私たちの世代は、『社会的に生きる』ことを知らなすぎるようです。」〔学生の反応、感想文より編集〕
- 23 関東 とくに熱心に聴講する学生は毎年20～30名。〔平均出席63名〕
- 25 名大 (総合) 学生の聴講が少い(関心がない?) 〔平均40名〕。②出席した学生はかなり関心をもっている(I氏)。  
眞面目に聴講した学生には平和問題を考える一つの契機となっているようである(K氏)。
- 25 名大 (国際法) 西側中心の見方を排し、グローバルな観点から国際関係をみる必要性を認識させることには大体成功していると思う。
- 27 中京 様々な角度からの講義を評価する者と、まとまりないとする者に二分。内容については平和論よりは軍事論だったのではないかとの印象も指摘された。多数が、講義の意義を評価している(自由記述式の感想分より)。
- 29 立命 ①ややむつかしいような気もするが不明。登録者・出席者数やや減。②3～4名の社会人の聴講あり(84,86年度)。
- 30 大阪 (政) 平和問題に真剣に取組むようになった。新しい歴史観をもつようになった。
- 30 大阪 (医) 感性豊かな感想文に課題を提起している。それが私のテキストづくりにつながっている。
- 31 神戸 ①戦争と平和の問題に関する基本的知識の欠けていることの自覚、②被害体験だけでなく加害体験、抵抗体験をもあわせて、戦争体験の継承を考えるべきことについての新鮮な反応、③将来、教師として平和教育を実践することを考えた場合、今までに平和教育の内容と方法がどのように築かれてきたのか、についての関心が強い。
- 33 広島 (総合) 学生の平和意識はますます後退、一般的なシラケ・ムードはどうしようもない。講義方式を変える必要を痛感している。来年度より多くの学生よりも、少数の学生の教育に力点をおく方向でやるつもりである(単位をきびしくする)。
- 34 四国 学内全体へのインパクトが大きく、国際性が出てきた。また、学生の中には外国で奉仕したり、働いたりすることを目指す者が出てきた。とくに核問題については、無知からの脱却が著しい。
- 36 鳴門 学生(院生・3分の2は現職教員)は熱心で、平和のための教育としての国際理解教育。
- 37 四女 参加者の殆どが、うたうことのすばらしさを覚えた様子である。
- 38 九大 (総合) 開講当時(81年)から積極的な意欲のある聴講者が少くなってきている。

- 38 九大 (公開) 極めて熱心な聴講者で、やりがいがあった。遠く諫早から欠かさず受講した70才をこす人もいた。
- 38 九大 (一般) 開講当時(75年)は20名位だったのでゼミ形式にしたが、毎年増加して200名を越すようになったので一方的な講義になった。最近はまた減少している。少弐になると熱意のある学生が殆どを占めるので雰囲気は良い。
- 40 長崎 (総合) 年を追うごとに、単位のために平和講座をとる学生がふえ、受講態度がだらけてきている。もちろん真剣な学生もかなりいる。単位を授与しないですむ平和講座であれば、純粋な熱意と関心をもった学生のみを対象にできる。それが理想。
- 40 長崎 少数だが熱心な学生が来聴するので、教養部の平和講座(総合)に比して講義しやすい。
- 41 鹿児 (政) 全く知らなかった日本の加害史を知り、びっくりしたというレベルが多い。「日本人は被害者意識が強い」ことを自覚した者が多い。
- 41 鹿児 (倫) 資料をよく準備し、教師の方が熱っぽく語れば学生の中に自覺的な平和意識が成長することは、レポートや感想の中に現れている。ビデオによる教育は刺激的だったようだ。しかし、ある程度変化した学生の平和意識が、授業以外のところで発揮されていない。行動にまで結びついていないし、平和意識をより堅固にする手立てが見つかっていない。(←学生運動、平和運動の弱体化と関係あり)。
- 42 琉球 二つの傾向がみられた。いずれも沖縄のきびしい軍事基地の状況を認識しているが、一つは非常に意欲を高めた学生。もう一つは、現実にどうしてよいか迷いをもつ学生、あるいは「もう一つ、はっきりしない」といった感想をもった学生がいた。
- 43 沖縄 かなりまじめに聞き、考えるようである。

---

## II - 7 問題点と抱負

---

問7) 実施した平和教育の問題点と今後の抱負について、ご記入下さい。――

- 北大 すでに7回実施したが、毎年改良を加え、北大スタッフの講義を基本としつつ、毎年度1回ずつ、その年度の重点事項について学外の優れた講師をお呼びし、一夜特別講義を挿入して新風を入れ、啓発に資している。毎回成功だった。今後も継続するのみならず、着実に改善をはかってゆきたい。スタッフ一同の一  
致が有難い。
- 北教 4~5名の講師による総合科目として通年の授業をおこない、前期・後期それぞれ3回程度の質疑討論の機会をつくりたい。
- 北星 1982年度の国連軍縮総会には北大及び北星学園大代表の形で参加したため、講義及び報告会でこの総会の模様を報告し、世界の平和への動きを詳しくのべた。

これについては多くの積極的反応があった。平和運動をはじめ、南北問題——発展途上国への協力問題、資源問題、自然環境と人間との共存など今日の問題に対する学生の意識を深めるような教育をしてゆきたい。

- 4 弘学 第2回国連軍縮特別総会にオブザーバーとして参加した。私自身大いに啓発された。
- 5 東北 家庭内や友人間の日常的会話の中で、幼児期から国際問題や平和・戦争・南北問題が話題になるというような状況ができないと、平和教育は実をあげられないような気がする。その意味で大学での平和教育には一定の限界があり、逆にいえば、大学外で早期からの平和教育を進める必要がある。
- 7 筑波 自分の研究を教育の中に生かしていきたい。
- 8 茨城 マンネリ化しないよう息長く育ててゆきたい。（「自分の専門の陣地に閉じこもっていることは許されない」「新聞」より。）
- 9 宇都 私は特に平和教育と名づけるような必要はないと思っている。反核・軍縮は勿論であるが、人権論・環境論・歴史教育等々、色々なかたちで各人が自分の専門をとおして平和と取組むことは可能であり、また大切だと思う。私は、今年、国際平和年に当り、平和に関することを多角的に法学教育に取り入れ、次第にその量を増し、最後に第九条の非武装平和主義の解説でしめくくりたいと思っている。
- 10 埼玉 総合講座形式であることから、①平和認識を系統的に深化させることが難しい。②感性的認識・実践的認識の深化・発展が難しい（ただし、担当者によっては、スライド、演奏等視聴覚的方法は取り入れている）。③学生の感性と嗜み合わせることの難しさ。④展望を語ることの難しさ。  
・映画・スライド・マンガ・小説等を活用し、2、3の克服を図ろうと企画中。
- 11 東大 国連大学とのネットワークをつくり、国際化すること、国際化の方向を強めること、平和運動のあたらしい形態を創造させること。Think Globally and Act Locally. アンケートの質問項目は必ずしも適切でない。
- 12 一橋 戦争又は戦争被害の学習で培った<人間の視点>を、専門課程でのさまざまな分野の研究においても生かせるよう、よりしっかりしたものにしていきたい。その中から、戦争被害を社会科学的に研究しようとする若い世代を、できれば生みだしたいこと。被害の実証的研究者は余りにも少ない。
- 13 東工 ことさら「平和教育」と銘打って講義をしているわけでなく、自己の信念と研究成果にもとづいて、静かにうったえつけているだけです。……持続的な仕事が大切と考えています。
- 15 早大 平和教育を貫して開発教育の見地から実施している。「現代社会」教科書が文部省検定ですたずたになったので、「平和教育」関係の副読本をまとめたい。
- 16 法政 (公開) 学生よりも社会人の方が多いようである。特定の教員によって平和問題関係のセミナーも定期的にもたれている。何年継続できるかわからないが、

- ボランティアの協力がたいへん大きいので、頑張っていきたい（世話人）。
- 17 中央 軍事力均衡論を“現実”視する考えと、危機感との矛盾に学生はおり、どう整理づけるかが課題。
- 18 立正 今後もつづける。平和教育の内面化、運動参加への問題を追究していきたい。
- 19 東海 年2～3回、まとまった形で、その時に応じた内容で平和教育をする必要性を痛感した（教養課程・物理学）。
- 22 明学 関心を触発された学生たちがサークルを作つて取組んでもらえるとよいと思っています。
- 23 関東 全学部に拡げることを検討中。また平和研究センターの設立構想もある。
- 25 名大 （総合）2年後期に開設している。1年次に開きたいが困難。今後も工夫しながらつづけていく（I氏）。
- 内容が総花的で充分に掘り下げたものとなっていない点、改善の必要性を感じている（K氏）。
- 29 立命 ①帝国主義の実態をリアルに説明すること。②社会主義国（特にソ連）の動向について基本的な考え方や具体的行動について、わかりやすく説明すること。
- 30 大阪 （政）身近な事例から総合的に取組みたい。
- 30 大阪 （医）少しのバリエーションで、すべての学部・学科で実施可能である。
- 31 神戸 5年間の試みを研究的にまとめてみたいという構想をもっている。
- 32 甲南 ただ感激するだけで終らず、具体的行動にまで高めたい。
- 34 四国 平和の問題は領域が広く、一人でやるのには限界がある。既存の教科目（「東南アジア社会論」「国際社会論」「人権問題概論」「公害論」など）との協力関係樹立をめざしている。
- 35 徳島 （公開）市民の活動する場をつくるための平和教育ではなかった。
- 36 島根 「平和教育」は、ややもすればイデオロギー的反体制思考に傾くおそれがある。ユネスコの国際理解教育の理念や地球社会教育（Global education）及び異文化間教育（inter-cultural education）をも含む、広い「平和のための教育」を確立していく必要がある。
- 37 四女 今後も良い教材を求め、よい音楽を作ることを学んでいきたいと思っている。
- 38 九大 （総合）希望者が多くて6割位に減らす、この時、真に強く希望する学生が選にもれるのが問題。多数の受講者なので一方的な講義になってしまう。
- 39 九工 どの位の割合まで平和教育に相当することを含めるべきか考慮中（「原子力概論」）。
- 40 長崎 （総合）単位と結びついた平和講座は墮落すると思われる。市民対象の公開講座では、ほんとうに勉強したい人だけが来聴するので、話をするのが楽しい。
- 41 鹿児 （政）戦争の原因や防止・回避手段についての社会科学的理説は殆ど与えることができないでいる。「戦争と平和」の問題は、社会・人文・自然の総合的教育の中に位置づけられないと成果はあがらない。恐慌がおこれば侵略は必然で仕方ない、やむをえないという意識を変革するのは意外と困難であり、「人間の本性=悪」という前提から戦争肯定論におちいる学生もみられる。

41 鹿児 (倫) 一人でやるには限界があり、今後、総合講義の形態を追求する。平和の感覚や旺盛な民主主義的な教師を養成するには、とくに教育学部での「平和教育」は不可欠だとの信念をもってきている。ともあれ一層輪を広げたい。

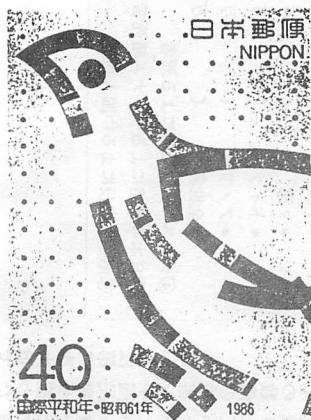
42 琉球 ①日常性に埋没し、飽食の時代に生活する学生に最大限意識を変革するにはどうするか? ②評価(意識変化の)を工夫すること。(当面は主として自己評価と意識テスト)。③授業の方法として、討論形式、小グループ学習など試みようとの意見もあった。④通年の授業にしたい。⑤学外の専門家を加えたい。⑥テキストづくり。

43 沖縄 テキストの整備、引用文献などは、まだ足りない。

国際平和年 (11月28日発行)



▲「手をつなぐ子どもたち」(井浦大画)



▲「鳩川端 有画」

大学生における平和への関心の構造

大學での平和教育のあり方を考える

私はここ数年間、大学の講義で平和教育を続けてきた。その中で簡単な——全く素人的な——アンケートも含めて、学生の戦争や平和への関心がどのようなものであるのかを考えて来た経過もある。

ひとく私か思つたのに、今日不足しているのは、大学の平和意識についての単なるアンケート調査なのではなく、学生の中に平和と戦争に関するどのような意識を、どのような方法と内容によって育っていくのかという実践的、課題意識と実験的実践そのものではないのかということであった。別の言葉でいえば大学生への平和教育実践の中から提出され、またその実践によって検証されるべき仮説の不足こそが問題とされるべきではないかということである。

二 矢論の構造の問題性

「平和教育」という近年の講義や「社会科教育法」の講義の最初に、聽講学生に對して行うアンケート調査の項目のひとつに次のようなものがある。

◇次の概数を記入してください。	
①広島原爆による死者	( 万人)
②長崎原爆による死者	( 万人)
③第二次世界大戦での国別死者数	
* 日本	( 万人)
* 中国	( 万人)
* フィリピン	( 万人)
* ドイツ	( 万人)
* アメリカ	( 万人)
* 全世界で	( 万人)
④ナチスの人種政策による死者	( 万人)
⑤日本の侵略によるベトナム餓死者	( 万人)
⑥南京大虐殺による中国人死者	( 万人)

ここからは第二次大戦での死者数において、日本の数倍の被害を中国国民党が被ったといふことがほとんど認識されていないという重大な知識の構造上の問題がうかびあがってくる。

これらはどのような問題性において捉えられるべきであるか。確かにまず、あまりに白紙が多いこと一要するに

佐貫浩

に対する日本の優越を意識させるものであり、また貿易市場における商品交換者どうしの形式上の「対等平等」関係は、日本とアジア諸国との相互依存と相互互恵の関係を結びあわせる。もちろん例外はあるとしても、青少年のアジア認識の基本的構造は、このような支配的な関係や情報の結果として、形式上の平等と意識上の優越、あるいはせいぜい優越の下での援助志向に止まらざるを得ない。とするならば、私たちが青少年に第二次大戦を教えるということは、彼らの中のそのような支配的なアジア認識の構造を吟味し、打ちこわし、組み替え、転換させるという仕事として進められなければならないだろう。第二次大戦における日本とアジア諸国との関係が、子どもたちの持つている認識の構図と逆のものであるならば、その“転換”を起こさなければ、第二次大戦というものが認識されたことにはならないのではないだろうか。

私の主観的な判断なのであるが、現代の大学生が今までに受けて来た社会科や歴史の教育の支配的な傾向は、たとえ部分的には日本のアジア諸国への侵略についての知識を与え得ても、全体として彼らの知識の構造の転換をせざる質を持ち得ていなかつたのではないか、そしてそのことと、そもそも現代史の教育がなされなかつたということ

の結果として、上記のようなアンケート結果が生じたのではないかと思うのである。

「構造的な知識」、あるいは「知識の構造」という言方にについて、若干ふれておこう。個々の知識は、それぞれ独立して記憶され得る。しかしそれらの知識が組み合わされる時、そこにひとつの傾向や関連や意味のある法則が把握される。逆にいえば、我々は社会をその社会を作り立たせている傾向や関連や法則をとらえることを通して認識しているのであり、単に個々の事実でモザイク的に社会をバラバラに認識しているのではない。個々人の中に捉えられた社会の傾向や関連や法則によって構造化された知識体系によって自分の頭腦の中に社会像を組み立てて、その社会像を常に新しい知識や法則や価値観によって組み替え、社会認識を発展させていくのである。

知識の構造の転換をせまる構造的な知識とはどのようなものであるのか。それは、それまでの知識によって組み立てられたあることがらについての像の基本構造と決定的に矛盾し、その組み替えをしなければその知識を受け入れることができない知識群であり、その知識群自体が、対置されるべき構造によつて不可分に関連づけられているものと言えるだろう。

受験競争＝学力偏差体制は、個々の知識についての記憶や操作能力を求める偏った学習努力を子どもたちに求め、知識によって「世の中を読む」（内田義彦『社会認識の歩み』岩波新書）ということを忘れさせられている。このような受験学力の構造を打ちこわしていくかなければ、現実を読み生活を営む時に子どもたちが働く社会像やその社会像に組み込まれた知識と、学校の学習で得る知識とは相互の矛盾を自覚することなく、また交渉しあう事なく併存してしまうだろう。そして構造に組み込まれなかつた知識の剥落（忘却）は早い。知識がいったん構造を結晶させたならば、たとえその知識が忘れられても構造は新しい知識で豊かにされ、その構造が逆に知識の剥落を妨げるようになるだろう。

今日、私たちは、子どもたちが新しい知識の獲得によって、それを手段として社会や歴史を科学的、主体的に読めるようになるような学習を通して進めていかなければならないのではないかだろうか。

### 三 現代というものの成立史の欠落

アンケート結果の第二点目の特徴は、現代というものの成立史の欠落とでも言えそうな様相である。

#### 四 大学生における現代というものの構造の変化

今日の大学生にとって、平和というイメージは、彼らの現代世界像と不可分に結びついて成立している。とすれば、平和意識の分析のためには、彼らの現代世界像の分析が不可欠であろう。現代社会についての認識の一環を構成するものとしての平和の観念は、現代世界の構造と、それについての価値判断を含んでいる。

ここ数年間の調査で共通している傾向のひとつに、他国からの侵略の脅威感の問題がある。今年の結果は次のようにであった。

〈調査 A〉 他国からの侵略の脅威は

ソ連から	53
米・ソから	13
米から	15
その他	8
合計	89
な	い
わからな	57
記入なし	49
合計	200

また、関連して分析しようと思う調査（調査B・C）の結果をはじめに示しておこう。

個々の結果について詳しく述べる紙面の余裕がないので、全体についての私の感想を述べておこう。

第一点は、戦争の原因について、ソ連の直接の脅威（27%）や米ソの核軍拡競争、局地戦争への大国（米・ソ）の介入が中心に考えられており、いわばそれらは日本の外から日本を襲う戦争への危機として把握されているように思われる。そしてそれは、それ程人々を深刻な危機意識に陥れるものではないとしても、相当広く（今回の調査では七割）人々を捉えていると言える。

第二点は、そのような外からの危険性に対し日本の安全を確保するということとして平和の課題が考えられているのではないか。例えば、日本の自衛隊の任務を一つだけ記入する項目では、「日本を守る」「国を守る」（主にソビエトの脅威に対して）のたぐいが59%と圧倒的で、アメリカの戦略分担や国家の安全、治安維持等、アメリカの戦略や國家権力の目的との関連で答えたものは13%であった（災害対策は6%）。また侵略の脅威感と自衛隊に対する態度を求める者の割合が高く、廃止を求める者の割合が少ないという傾向をはつきり読みとることができる。

第三点は、核の日本の持ちこみについては多くが「持ち込まれている」—「それは米ソの核戦争にまきこまれる危険を高める」という関連認識を持つている（その選択を選んだのは一四八人、七四%）が、米ソの対決の間での核抑

侵略の脅威感と自衛隊に対する態度  
( )内の数字はa.b.c群それぞれの中での%

侵略の脅威		自衛隊について						
侵略の脅威	a.ソ連から	自衛隊を増強		現状維持	縮少	廃止	わからない	合計
		9(17)	19(36)					
侵略の脅威あり	a.ソ連から	9(17)	19(36)	14(26)	6(11)	5(10)	53(100)	
	b.米・ソから	4(14)	6(21)	8(29)	10(36)	0	28(100)	
	c.は米から	2(4)	24(42)	13(23)	14(25)	4(7)	57(100)	

止論についてかなり高い肯定があり（上記一四八人のうちでも六人が肯定している）と日本だけの平和を考える場合の核認識（核の否定）と米ソの核対決、しかもソ連の脅威感が強まっている中で肯定される世界の平和の方法としての核抑止論とが共存しているように思われる。

第四点は、学生たちは、たてまえや憲法規範に照らして平和の戦略を構想する（例えば憲法第九条からみれば自衛隊は違反だから廃止した方がよいというような考え方）ではなく、彼らの描く世界の構図の中で、たてまえや理想論ではなく、ある意味でリアルに現実的に考えようとしているように思われる。〈調査B〉の「違憲」だけれども「増強」あるいは「現状維持」という選択などはそのように読むこともできよう。

これらの諸点を重ねあわせてみると、我々は、あらためて戦争の原因や平和の危機を認識する構図がここ十五年間程の間に大きく転換したことを気付かされる。私自身は一九六五年に大学に入学した。そしてアメリカのベトナム侵略戦争反対という世論の高まりの中で帝国主義を戦争の元凶とし、それに協力する自民党や自衛隊を平和を脅かす者

として捉える世界認識の構図の中で世界との意識的なかわりを持つようになつていった。それが当時の学生時代のいわば常識のようなものであつたようにも思う。

しかしここで、ただ単純に昔の私たちの世界認識の構図が正しく、今の学生の構図が間違っているということを言おうとしているのではない。学生の平和意識の今日のあり様を、單なる保守化として据えそれに対して「革新的な平和道徳」を教化することでは全く不十分であり、人類の歴史の進歩を展望できないような世界の構図、世界認識の構図によって彼らが世界を把握できるようにする必要があるということを言いたいのである。大学生に対する平和教育の課題は、単に平和道徳を彼らに教化することではなく、平和によって進歩が実現されるような世界の構図を彼ら自身が形成・獲得することを援助することであろう。

そのような青年学生の世界像の転換という仕事に我々はどうにして取り組んでいけばよいのだろうか。そしてまた今日の社会科学や教育内容はそのような転換と発展を導いていく質を持ち得ているのか等が、あらためて問われなければならない。

#### 「平和教育」No. 21

一九八五年十一月発行より抜粋引用



止論についてはかなり高い肯定があり（上記一四八人のうちでも六人が肯定している）と日本だけの平和を考える場合の核認識（核の否定）と米ソの核対決、しかもソ連の脅威感が強まっている中で肯定される世界の平和の方法としての核抑止論とが共存しているように思われる。

第四点は、学生たちは、たてまえや憲法規範に照らして平和の戦略を構想する（例えば憲法第九条からみれば自衛隊は違反だから廃止した方がよいというような考え方）ではなく、彼らの描く世界の構図の中で、たてまえや理想論ではなく、ある意味でリアルに現実的に考えようとしているように思われる。〈調査B〉の「違憲」だけれども「増強」あるいは「現状維持」という選択などはそのように読むこともできよう。

これらの諸点を重ねあわせてみると、我々は、あらためて戦争の原因や平和の危機を認識する構図がここ十五年間程の間に大きく転換したことを気付かされる。私自身は一九六五年に大学に入学した。そしてアメリカのベトナム侵略戦争反対という世論の高まりの中で帝国主義を戦争の元凶とし、それに協力する自民党や自衛隊を平和を脅かす者

として捉える世界認識の構図の中で世界との意識的なかわりを持つようになつていった。それが当時の学生時代のいわば常識のようなものであつたようにも思う。

しかしここで、ただ単純に昔の私たちの世界認識の構図が正しく、今の学生の構図が間違っているということを言おうとしているのではない。学生の平和意識の今日のあり様を、單なる保守化として据えそれに対して「革新的な平和道徳」を教化することでは全く不十分であり、人類の歴史の進歩を展望できないような世界の構図、世界認識の構図によって彼らが世界を把握できるようにする必要があるということを言いたいのである。大学生に対する平和教育の課題は、単に平和道徳を彼らに教化することではなく、平和によって進歩が実現されるような世界の構図を彼ら自身が形成・獲得することを援助することである。

そのような青年学生の世界像の転換という仕事に我々はどうにして取り組んでいけばよいのだろうか。そしてまた今日の社会科学や教育内容はそのような転換と発展を導いていく質を持ち得ているのか等が、あらためて問われなければならない。

#### 「平和教育」No. 21

一九八五年十一月発行より抜粋引用

止論についてはかなり高い肯定があり（上記一四八人のうちでも六人が肯定している）と日本だけの平和を考える場合の核認識（核の否定）と米ソの核対決、しかもソ連の脅威感が強まっている中で肯定される世界の平和の方法としての核抑止論とが共存しているように思われる。

第四点は、学生たちは、たてまえや憲法規範に照らして平和の戦略を構想する（例えば憲法第九条からみれば自衛隊は違反だから廃止した方がよいというような考え方）ではなく、彼らの描く世界の構図の中で、たてまえや理想論ではなく、ある意味でリアルに現実的に考えようとしているように思われる。〈調査B〉の「違憲」だけれども「増強」あるいは「現状維持」という選択などはそのように読むこともできよう。

これらの諸点を重ねあわせてみると、我々は、あらためて戦争の原因や平和の危機を認識する構図がここ十五年間程の間に大きく転換したことを気付かされる。私自身は一九六五年に大学に入学した。そしてアメリカのベトナム侵略戦争反対という世論の高まりの中で帝国主義を戦争の元凶とし、それに協力する自民党や自衛隊を平和を脅かす者

として捉える世界認識の構図の中で世界との意識的なかわりを持つようになつていった。それが当時の学生時代のいわば常識のようなものであつたようにも思う。

しかしここで、ただ単純に昔の私たちの世界認識の構図が正しく、今の学生の構図が間違っているということを言おうとしているのではない。学生の平和意識の今日のあり様を、單なる保守化として据えそれに対して「革新的な平和道徳」を教化することでは全く不十分であり、人類の歴史の進歩を展望できないような世界の構図、世界認識の構図によって彼らが世界を把握できるようにする必要があるということを言いたいのである。大学生に対する平和教育の課題は、単に平和道徳を彼らに教化することではなく、平和によって進歩が実現されるような世界の構図を彼ら自身が形成・獲得することを援助することである。

そのような青年学生の世界像の転換という仕事に我々はどうにして取り組んでいけばよいのだろうか。そしてまた今日の社会科学や教育内容はそのような転換と発展を導いていく質を持ち得ているのか等が、あらためて問われなければならない。

#### 「平和教育」No. 21

一九八五年十一月発行より抜粋引用

止論についてはかなり高い肯定があり（上記一四八人のうちでも六人が肯定している）と日本だけの平和を考える場合の核認識（核の否定）と米ソの核対決、しかもソ連の脅威感が強まっている中で肯定される世界の平和の方法としての核抑止論とが共存しているように思われる。

## 「今、日本は平和ですか？」

### 参考資料 2

——学生の感想文の初めと終りで——

堀 孝彦

(1) 1984年度のはじめ、各講師が自己紹介などをおこなった最初の授業で、筆者は「今、日本は平和だと思いますか」、それとも「平和ではないと思いますか」を問い合わせ、出席カードに簡単にその理由を記入してもらった。平穏・無事・安定・苦労なし・大学入学できた等が「平和である」ことの理由にあげられ、「平和でない」理由としては戦争の危険・環境悪化・内面の荒廃などであった。「戦争がないから平和」という「平和」理解がかなり目立つのも、まだ何の説明も与えていないこの時期の特徴を示している。結果は次の通りであった。

学部	教育学部	経済学部	計
平和である	94名(68%)	15名(65%)	109名(68%)
平和でない	44 (32%)	8 (35%)	52 (32%)
計	138 (86%)	23 (14%)	161 (100%)

経済学部の聴講生は教育学部の6分の1であるが、両学部とも、ほぼ7:3の比率で「平和である」「平和でない」に分かれている。この集計を次週の授業で紹介したところ、まったく相反する2通りの反応が返ってきた。ある学生は「全員が“平和”である」と答えたものと思っていたのに、50名もが“平和でない”とは意外。私は楽天的すぎるのだろうか」と云い、他は逆に「“平和だと思います”が100名もいるなんて、とてもおどろいた」というものである。

1年たってどうなったか、アンケートとしては求めなかつたので数量的にはわからないが、最終講義も担当した筆者が「1年前と同じ問い合わせを再び投げかけることにしよう」といって結びのことばとしたことに触れた感想文が、かなり寄せられた。それらを含めて、年度末に総括的に書かせた文章——1年間の各自の変化を本講座の内容にかかわって書いてほしい、という設問への解答——のなかから、積極的なものを拾ってみることにする。

(2) 「今、日本は平和ですか」という設問にかかる変化を整理してみると、

イ 「私の中で“平和である”と言わせないも

のが生れた」(A)。「もしまた聞かれたら、平和であるかどうかも疑わしい。この講義の与えた影響はそれほど大きかった」(B)。「戦争への不安が取り除かれないかぎり、平和でないと、きっぱり答えることができます」(C)。

ロ 「前よりも一層自信をもって“平和でない”と答えることができる」(D)。「1年前、口では“平和でない”と答えたが、本当に理解していなかった。今、私は自分が少し変わったのではないかと思う」(E)。

ハ 「今でもやはり“平和である”と答えるが、それは平和を求める人びとの熱い気持があるから、未来を信じるがゆえにである」(F)。

(3) 「この講義をうけて私は本当に変わったと思う」(G)。そのことは、「平和を守るという形で答えなければならない」(H)。「戦争をしないようにするという消極的なことではなく、平和にする(築く)という積極的なことを考えさせられた」(I)という表現にも示されている。

(4) この変化は、どのようにして生じたのであろうか。当初は「遠い所の出来事」(J)であり、「なぜ平和について考える必要があるのか」(K)もわからず、「原因や責任について考えたことなどなかった」(L)。それは「自分の周りだけを考え、外へは目を向けなかつた」(M)からであろう。「自分の身の危険だけを考えている自分のエゴイズムが恥しくなりました」(N)。今では「もっと世界に目をむけた答えが出せるような気がします」(M)。

(5) 視野の拡大は、《内への》省察を通して深められていく。戦争体験の内面化=継承の問題についての講義(第19講「戦争体験をいかに継承するか」羽田貴史講師など)は、「外へ外へ手をのぼし、もがいていた私に、自分の中にその答えを探すこと——の大切さ、またその大変さ——を教えてくれた(O)。

この点で、VTR「予言」や、被爆体験の話など

が大きく働いていることがわかる。「人間の強さ」(T)を感じ、「威厳にも似た意志をもつ人のいることを知り、戦争はイヤだと言っているだけではダメで、平和への主体的姿勢をもつ必要」(P)に気づくようになる。

(6) ここから、「平和は誰かに作ってもらうのではなく、自分で作っていくのだということ」(Q)に気づき、さらに「教師としてどのように平和を教えていったらよいかに目を開かされて」(R)ゆく。

(7) しかし、《今、平和ではない》とは思うものの、「それをボンヤリ感じるくらい」(S)にすぎず、また「私が何をしたらよいかは全然考えつかず、考えついたとしても力はなく、どうしようもない感じ」(U)の者も、依然としている。

(8) いずれにせよ、この平和講座は「高校までの授業では」触ることのなかった世界」(V)であり、とまどいが見られる。それは「反核=危険思想のイメージ」(V)があったからでもあるが、それだけではなく、「知識も大切だが、それについての根本的なことを考えさせられた」(W)授業だったからであろう。

次のような感想文もある。「はたしてこの授業は

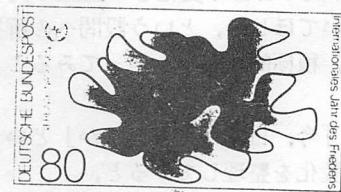
（M）したくて、我慢できなくて出でて答へなければ

学問といえるであろうか。漠然としたものを学問すること自体まちがっている。しかし戦争はことば〔で覚える知識〕でなく、人生の一部。知識のみで終らせようとしている自分に気づく」(X)。ここまでくれば、これらは一般教育のあり方についての琴線にふれる問題となってくる。

(9) 「生ましめんかなの詩に感動。いのちの尊さがしみじみと伝わってくる。普通の講義では味わえない先生方の心に触れられた気がした」(Y)。「毎週レポートを書かせてほしいと、大それた感想を〔以前に〕書いたが、それほどの感動と精神的充実感があった。人間の偉大さは、理想的、理論的なことを思考すること、それに実践性も加わる。……学生としてもっとも学びがいのあるテーマであった」(Z)。

それは、「人間全体を考えねばならぬと思った」(α)からであろう。「人間とは何かを考え、その可能性を無限に引きだすには眞の平和が必要であり、与えられた平和でなく、主体的努力によってかちとられねばならない」(α)と、なっていく。

「…………」内は、すべて学生の感想文、答案からの引用であり、その氏名を A, B, C……で示した。



### III 結び（方向）

以上のアンケート集計をもとにしながら、さしあたって得られる諸点を挙げ、今後の検討にゆだねることにする。

- 1 今回の調査結果は、全体として平和・軍縮教育という切り口からみた、今日の大学教育の実態をよく示している。今までにない多くの積極的側面があきらかにされたが、同時に、大学教育の当面している問題点をも浮かび上がらせている。したがって、大学における平和教育を持続・拡大するには、今後とも多くの工夫や努力が必要である。  
他方、この新しい教育実践の試み、とくに集団的とりくみを契機に大学教育全般の活性化の可能性も開けている。
- 2 そのためには、多様な重層的構造をもったカリキュラムの編成が必要である。総合講座の実践も大切であるが、それに終わらせずに、専門教育そのものなかへ発展させ、専門科目と一般教育との全体において、また、一斉講義とゼミの双方を通じて総合的に行なっていくのが一番望ましい。
- 3 今までなく視聴覚教材なども活用されているが、基本的な教材・テキストをいろいろ作ってみる必要がある。
- 4 総じてこの新しい実践を定着させていくためには、大学における平和教育に科学のメスを入れ、その科学化をはかって行かねばなるまい。そのためには、課題や仮説の設定が必要である。たとえば、ソ連脅威論の克服、行動への動機づけ、地球的視点、人間主体の視点等。
- 5 先行している小・中・高校における平和教育の実践に学ぶとともに、大学におけるあたらしい試みは、初等・中等教育に対しても刺激をあたえることだろう。
- 6 國際的に見て、今日の教育現場の保守化は甚だしいものがあり、大学もまたその例外ではなく、歴史を創造していく学力を育てていない。客観的知識を教えていくことの必要性とともに、たんなる知識に終わらないpeace-maker、平和な社会の創造主体の育成こそ必要である。
- 7 平和・軍縮教育は、今日の歴史と社会が必然的に提起している最大の課題にたいして研究と教育の両面から対応していくことであり、人類の生存にかかる、すべての大学人の責務である。
- 8 アンケートへの協力者間、平和教育実践者・平和教育研究者間のネットワークを持続・拡大していきたい。

〔アンケート調査用紙〕

1986年2月15日

大学における平和教育調査御協力のお願い

日本科学者会議

平和・軍縮教育研究委員会

委員長 藤田秀雄

近年、大学において、平和問題の講座を開設する事例が非常にふえてまいりました。日本科学者会議では、平和・軍縮教育研究委員会の活動の手はじめとして、その全国調査をおこなうことにいたしました。その結果の発表は、大学における平和教育の拡大と、内容の一層の充実に役立つものと考えております。

御多忙中と存じますが、貴大学における平和教育に関して、御回答下さるようお願い申しあげます。

調査事項をご記入のうえ、4月末日までに、日本科学者会議あて、お送り下さればさいわいです。

御記入に関してのお願い

1. 本調査で、平和問題とは、戦争の問題に限定せず、人権抑圧や貧困・飢餓の問題等もふくみます。
2. 「平和講座」等の名称を用いない場合も御回答下さい。
3. ここで、大学とは、短期大学も含みます。
4. 同じ先生が、たとえば総合講座でも、一般の授業でも平和教育をおこなっている場合は、それぞれ用紙をかえて御回答下さい。そのさい、用紙が別に必要とされる場合は、日本科学者会議に御連絡下さい。また、用紙をコピーして御記入下さればさいわいです。
5. 大学名、個人名の発表をさしひかえる時は、その旨、欄外に、ご記入下さい。

お問い合わせ、調査票送り先

④113

東京都文京区湯島1-9-16

日本科学者会議

電話 03-812-1472

## 大学における平和教育調査票

### I. (1) 大学・学部(専門領域)名

(2) 講義・講座名

(3) 担当者(あるいはおもな担当者)名

### II. (4) 講座・講義等の形態——つきのいずれかに○をつけて下さい。

(以下、a), b), . . . とある欄は同じ。)

- a) 個人が担当している講義(カリキュラムの一部の場合も)
- b) 個人が担当しているゼミナール(カリキュラムの一部の場合も)
- c) 総合講座(学生対象で、複数の教師が担当しているもの)
- d) 学生の自主的研究・学習活動への協力
- e) 一般市民向け公開講座(そこに学生が参加する場合も)
- f) その他(ご記入下さい)

### III. (5) 開設・開始年度(以後毎年か)

年度

### IV. 1985年度の概況

#### (6) 期間——a) 通年

b) 半期か

c) カリキュラムの一部

(回数 回)

#### (7) 対象学生——a) 全学の学生

b) 特定学部・学科学生

(学部・学科名 )

#### (8) 聴講 参加者数

登録者数( 名)

平均出席者数( 名)

#### (9) 教師数 名

内訳 学内者 名

学外者 名

学内教師の学部別内訳

(10) 総合講座、公開講座の場合、講座全体にわたって出席していた講師がいましたか。(いれば、その所属学部と氏名をご記入下さい)。

V. 教育内容と方法（1985年度の場合）

カリキュラム表、講義概要のコピーを調査票といっしょにお送り下さい。なければ、下にお書き下さい。

(11) 使用テキスト名（著者名、出版社名も）

(12) 学生にすすめた参考書名と、使用した視聴覚資料名

(13) 見学・訪問、調査等をおこなった場合はその内容

(14) その他教育の内容・方法について特色やとくに重視している点をご記入下さい。

(15) 試験出題・評価の方法についてご記入下さい。

VI. (16) 聴講・参加者の反応（意識変化をふくめ）についてお感じになったことをご記入下さい。

(17) 実施した平和教育の問題点と今後の抱負についてご記入下さい。

今後お問い合わせすることもありますので記入された方のお名前をお書き下さい。

御芳名

## あとがき

昨夏、個人的におこなった「平和講座についてのアンケート」調査で31例の回答を得たのが事のはじまりであった。そのなかの数例が今回は未回答なのは残念であるけれども、全体としては量的にも上廻ることができ、ご協力に重ねて感謝している。

わが国でも、国際的にも、子どもの平和教育は、早くから小・中・高校の教師によってとりくまれているが、学生や市民の平和教育は、近年になって漸く広がってきた。現在の深刻な事態を思えば、成人の平和教育こそ肝要である。

このパンフレットは、本委員会による調査の集計であるが、今月予定されているいくつかの研究集会においても討議資料として活用していただきたいため、ワーキング・グループを中心に短期間で編集した。調査の集計のほかに、大学平和教育にかんする研究リストと参考資料とを、余白を使って最小限のせたが、もとより不十分極まりないものである。

ご意見、ご批判をいただきながら、お互いの間のネットワークを密にしていきたい。数年後に再度、アンケート調査を実施することも考えられよう。

1986年11月3日

日本科学者会議平和・軍縮教育研究委員会

ワーキング・グループを代表して

堀 孝彦（名古屋学院大学）

### 「平和・軍縮教育研究委員会」委員一覧

—1985～86年度—

- |                       |           |
|-----------------------|-----------|
| 藤田 秀雄（立正大、社会教育学）      | 委員長、WG    |
| 榎原 道夫（東海大、物理学）        | 担当常任幹事、WG |
| 雨宮 昭一（茨城大、政治学）        |           |
| 中村 方子（中央大、生物学）        |           |
| 堀 孝彦（名古屋学院大、倫理学）      | WG        |
| 安斎 育郎（立命館大、原子力工学）     | WG        |
| 高木 昌彦（大阪大、医学）         |           |
| 藤井 敏彦（広島大、教育学）        |           |
| 森 茂康（九州大、物理学）         |           |
| 鎌田 定夫（長崎総合科学大、文学）     |           |
| 吉村 高男（山口県立大津高等学校、物理学） |           |
| 武居 洋（琉球大、生化学）         |           |

WG：ワーキング・グループのメンバー

お願い

- 1 広義の「平和教育」実践者・研究者、総合講座などを、お知らせ下さい。
- 2 あなた御自身の実践内容を、ご紹介ください。
- 3 " 実践報告・研究・資料などの刊行物を、お送り下さい。
- 4 その他、ご意見を、お寄せ下さい。ニュースレターをお送りします。

送り先：〒480-11 愛知県愛知郡長久手町長湫 丸山住宅1-102

堀 孝彦 宛 Tel. (05616) 2-9247

又は 〒113 東京都文京区湯島1-9-16 日本科学者会議

「平和・軍縮教育研究委員会」宛 Tel. 03-812-1472



---

大学における平和教育

—アンケート調査による現状と方向—

発行日 1986年11月10日

編集・発行 日本科学者会議平和・軍縮教育研究委員会

〒113 東京都文京区湯島1-9-16

☎ 03-812-1472

---

実費 500 円

*Itō*